

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2012

1

ISSN 1340-8917



特集 ■ “パワースポット”を活かしたまちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

“パワースポット”を活かしたまちづくり

- 4 魅力ある地域資源を活かし観光振興を 塩月亮子 (跡見学園女子大学 マネジメント学部 観光マネジメント学科 教授)
- 8 秋田県鹿角市 縄文時代の姿を残す大湯環状列石 高杉賢吾
- 10 岩手県岩泉町 龍泉洞内の地底湖に安らぎと感動 小野寺貴幸
- 12 茨城県神栖市 「東国三社」詣ツアーに舟運も活用 荒井昭男
- 14 新潟県弥彦村 彌彦神社のパワーで観光客を元気に！ 白崎純也
- 16 長野県伊那市 分杭峠の「ゼロ磁場」にリピーター 伊那市長谷総合支所産業振興課
- 18 岐阜県下呂市 自然との共生をめざしたまちづくり 桂川淳平
- 20 兵庫県佐用町 「陰陽師の里」づくりでまちを活性化 久保正彦
- 22 鳥取県鳥取市 日本最古のラブストーリーの地・白兎 有本公博
- 24 沖縄県南城市 「東御廻り」と癒しのふるさと 大城秀子

レギュラーレポート

- 26 地域トピックス
高知県梼原町
龍馬脱藩の道で出会いの感動を！
「坂本龍馬脱藩の郷 ゆすはらであいの会」事務局
- 28 長崎県津島市
対馬の再生へ若き女性らが熱意 渥美輝夫
- 30 移住・交流推進支援事業 (徳島県神山町)
ワークインレジデンスを活用した創造的移住の推進 大南信也
- 32 スポーツ拠点づくり推進事業 (神奈川県横浜市)
「横浜スタジアム」を中学球児憧れの地に 齋藤正守
- 34 地域再生実践塾 平成二十三年度第四回 沖縄県那覇市
コミュニティ主体によるまちづくり
宮城能彦 (沖縄大学人文学部 こども文化学科 教授)
- 36 地域活性化フォーラム in 岩手
復興へ向け地域の連携を呼び掛け
- 38 地域づくり団体探訪
NPO 法人淡路島アートセンター
「アート」で淡路島の魅力伝える 兵庫県洲本市
- 40 湖西フロンティア倶楽部
自然の恵みを生かす里山の取り組み 静岡県湖西市
- 42 ～北から南から～ 千葉県中房総地域
「中房総」を世界に通じる観光地に！ 佐久間隆義
- 44 JOIN 移住・交流イベント
来て、見て、ふるさと。発見祭！！
- 46 首長の思い
絆で築く元気な米原市づくり 泉 峰一 (米原市長)
- 48 センター通信

グラビア

- 2 “パワースポット”を活かしたまちづくり
- 47 手前みそですが… 【埼玉県上尾市】



ドラマの舞台となった岸和田駅前通商店街

「カーネーション」の舞台・岸和田 (大阪府岸和田市)

平成二十三年十月三日から放送中のNHK連続テレビ小説「カーネーション」の舞台となつている岸和田市では、主人公のモデル小篠綾子さんのお店があつた南海本線岸和田駅前通商店街を中心に、さまざまな取り組みが行われている。

十月五日には、企業グループ「大輪会」の支援を受けて、大阪府岸和田土木事務所が育てた花苗と大阪府蜻蛉池公園指定管理者から無償提供された花苗あわせて約三千株のカーネーションを岸和田駅前の花壇に植栽した。植栽式には、綾子さんの娘コシノ三姉妹の母校・岸和田市立中央小学校の六年生の児童も参加した。

小篠綾子さんのお店があつたところには、コシノギャラリー「洋裁コシノ」ができており、昔の作業場を再現。ほかに「カーネーション」の撮影に使われた衣装などを展示したNHKギャラリーや「和撫子(カーネーション)ショップ」もあり、舞台地・岸和田を盛り上げている。

(写真提供：岸和田市)

問い合わせ：岸和田市役所観光課
(072-4260-6486、ホームページ)
<http://www.city.kishiwada.osaka.jp>

表紙

年頭所感

総務大臣 ● 川端達夫



二〇一二年が始まりました。皆様におかれては、気持ちも新たに新年をお迎えになったものと思います。

昨年は、東日本大震災をはじめ、台風、大雨などの自然災害が多発し、多くの方が犠牲になりました。被害に遭われた方々に対して、心からお見舞い申し上げます。

さて、総務大臣に就任してから初めての正月を迎えました。これまで夢中で走ってきましたが、本年も、東日本大震災からの復旧・復興に万全を期すとともに、地域主権改革、ICT施策、郵政改革、行政改革の推進など当面する諸課題に取り組んでまいります。

東日本大震災からの復旧・復興は内閣の最優先課題です。総務省としても、これまで被災地・被災者への支援に全力を尽くしてきておりますが、第三次補正予算においては、第一次・第二次補正予算も含めた復旧・復興事業に係る地方負担分や地方税の減収分等について全額措置する震災復興特別交付税を一・七兆円増額確保し、被災団体の負担をゼロとすることとしました。

また、平成二十四年度においても、東日本大震災の復旧・復興事業について、通常収支とは別枠で整理して所要の事業費及び財源を確保し、その中で、震災復興特別交付税を〇・七兆円確保してまいります。

復興に向けた地方税制の対応については、地方自治体が実施する防災のための施策に必要な財源を確保するための措置及び被災者の税負担の軽減を図り、復興を支援するための措置等を講ずることとしております。また、大震災の発生後における合併市町村の実情に鑑み、合併市町村が合併特例債を起こすことができる期間を延長することとしており、必要な法案の成立に全力を挙げて取り組んでまいります。

今後においても、大震災からの復旧・復興に必要なとなる地方の事業費及びその財源については、通常とは別枠で整理し、国費による措置を大幅に拡充した上で、地方財源も確実に確保するとともに、個別具体的な要望を伺いながら、スピード感を持って対応してまいります。

先般、総理に提出された地方制度調査会の「地方自治

法改正案に関する意見」をふまえ、速やかに必要な修正などについて具体的検討を行い、次期通常国会への法案提出に向けた準備を進めてまいります。

また、それぞれの地域資源を最大限活用し、域内循環を進める「緑の分権改革」を推進してまいります。あわせて、市町村が連携し、圏域ごとに生活に必要な機能を確保する「定住自立圏構想」や過疎対策への取組を支援してまいります。

地方財政については、中期財政フレーム（平成二十四年度～平成二十六年度）に沿って、社会保障費の自然増や地域経済の基盤強化などに対応する財源を含め、地方の一般財源総額について、平成二十三年度と同水準の五十九・六兆円を確保するとともに、特に地方交付税については、通常収支分の地方交付税総額について十七・五兆円、前年度比〇・一兆円増額確保してまいります。

地方税制については、地域主権改革を推進する中で、地方がその役割を十分に果たすため、地方税を充実し、税源の偏在性が少なく、収収が安定的な地方税体系を構築していきます。平成二十四年度税制改正においては、地域決定型地方税制特例措置（通称・わがまち特例）の導入や税負担軽減措置等の見直しを行います。引き続き、地方税制度を「自主的な判断」と「執行の責任」を拡大する方向で抜本的に改革していくこととし、成案を得たものから速やかに実施してまいります。

地域主権改革の推進は、国と地方の在り方を根本的に転換し、地域のことは地域に住む住民が責任を持って決められるようにするための改革であり、引き続き改革の実現に向けて取り組んでまいります。

総務省の抱える課題は、大変幅広い分野に及んでおります。今後も総務省の総合力を生かして、国民の皆様の目線に立って各般の施策を着実に推進し、これからの生活がますます豊かなものとなるよう努力していきます。

本年も皆様の御支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

“パワースポット”を活かしたまちづくり



龍泉洞内の第一地底湖 観光客に安らぎを与える

● 岩手県岩泉町 (p10-11)



縄文人の息吹が感じられる大湯環状列石の全景

● 秋田県鹿角市 (p8-9)



弥彦神社の正面 全国でも珍しい“石油の神様”ともいわれる

● 新潟県弥彦村 (p14-15)



「東国三社」詣モニタリングツアーの様子

● 茨城県神栖市 (p12-13)



分杭峠で“ゼロ磁場”を体感するツアー客

● 長野県伊那市 (p16-17)



「陰陽師の里 江川」でコスプレ体験
● 兵庫県佐用町 (p20-21)



落差30mの「仙人滝」を見学する市民ツアー
● 岐阜県下呂市 (p18-19)



国指定史跡での体験ウォークを楽しむ
● 沖縄県南城市 (p26-27)



大国主神と白うさぎ伝説がある白兎海岸の景色
● 鳥取県鳥取市 (p22-23)

魅力ある地域資源を活かし観光振興を

「パワースポット・ブームの現状と課題を考える」



跡見学園女子大学 マネジメント学部 観光マネジメント学科 教授 ● 塩月亮子

はじめに

最近、「パワースポット」という言葉は、精神世界関係の本のみならず、様々な雑誌類、テレビ番組などで、頻繁に取り上げられるようになった。また、観光案内パンフレットやホームページにも、パワースポットという用語がごく普通に使用されるようになるなど、今やパワースポットは観光分野においても貴重な地域資源となっている。

本稿では、昨今のこのような「パワースポット・ブーム」を観光との関係から読み解き、現状からその諸特徴を抽出し、さらにはこのブームの今後について、考察を試みたい。

1. 定義の変化

「パワースポット」とはいったい何か。霊場や

聖地、磁場、気、風水、大地の力、あるいは温泉、繁華街、テーマパークまでもが「パワースポット」とよばれることがあり、その用語の示す内容は様々で、明確な定義はないといえる。

しかしながら、その定義の変遷には、一定の方向性が見てとれる。たとえば、二〇一二年（平成二十四）の『現代用語の基礎知識』（自由国民社）には、パワースポット（power spot）とは「心身を癒してくれる自然のエネルギーに満ちた場所」とある。だが、この辞典が初めて「パワースポット」を収録した一九八六年（昭和六十一）版では、宗教学者の脇本平也により次のような解説がなされた。

パワースポット（power spot）——宇宙の精気や霊力の凝集する聖地。宗教的世界観によれば、宇宙は決して等質的・無性格的に広がっている物理的空間ではなくて、意味によって構成された聖なる中心をもつコスモスである。

その中心に向かって力は収斂し、その中心から力は放射する。それは意味のわき出てくる源泉としての聖なるトポス（場）であり、大地のへそとも呼ばれる。このような宗教的空間論から、聖地の観念や巡礼の修行などがさまざまな形で生まれてくる。

最近、とくにミュージシャンを中心とする若いアーティストの間で、奈良県吉野郡天川村の天川大弁財天社が、宇宙との交信の靈感を授けられるパワースポットとしてもはやされているという。四国をはじめとする各地の巡礼や神社めぐりなども、今や単なる観光旅行には飽き足らぬ人々の心をひきつけているようである。

マイルドな定義へと変化

一九八〇年代においては、「パワースポット」という用語は今ほど人口に膾炙していなかったため、このような詳細な解説がなされたのであろう。

両方の解説を比較すると、一九八六年の解説では、パワースポットは「聖なる中心」に向かつて「力」が収斂・放射する「聖地」あるいは「聖なるトポス（場）」であり、ここでは「宇宙との交信の靈感を授けられ」、「巡礼」や「寺社めぐり」も（その意味において）なされるということになっている。

一方、二〇一二年の解説では、「宇宙」が「自然」に変わり、「力」は「エネルギー」となり、「聖地」という用語は消え、「癒し」という用語が新たに加わった。そこには、パワースポットは「宇宙との交信」を行う「聖地」という、いわゆる宗教的・能動的な意味解釈が希薄化し、その範疇が伝統的寺社や巡礼地を超えて拡大し、その内容は世俗化・大衆化、あるいは受動化したことが見受けられる。パワースポットが「癒し」の場というように万人に受けるマイルドな定義へと変化したことは、その用語を用いて地域活性化を図ろうとする地方自治体や観光関連産業、宗教団体などにとって、大いに追い風になったと推察できる。

2. ブームの経緯

今日の「パワースポット・ブーム」を生み出したのは女性誌であり、若い女性たちがこのブームを牽引しているといわれている。神社とパワースポットの関係を研究した宗教学者の菅直子によれば、「パワースポット・ブーム」の起りりとその後の経緯は、次の通りである^①。

女性誌（主に二十〜三十代の働く女性を读者イメージにもっている雑誌）が企画するパワース

ポット特集は、二〇〇二年（平成十四）に始まり、二〇〇四年（平成十六）〜二〇〇五年（平成十七）にかけて、そのような特集は増加傾向を示した。

メディアでも〇五年以降急速に関心が高まる

マス・メディア全体においても、二〇〇五年以降、パワースポットへの関心が急速に高まった。二〇〇六年（平成十八）〜二〇〇八年（平成二十）の三年間で女性誌におけるパワースポット特集は飛躍的に増加したが、それは四十〜六十代を対象とする女性誌をはじめ、女性誌以外の情報誌や週刊誌などにも広がり、観光PRや旅行案内の記事のキャッチコピー、またドラマのロケ地や行列のできる店などを紹介する記事の見出しにもなった。

同じ時期、「聖地巡礼」という用語も新語・流行語となったが、これは本来の「信者が聖地に赴くこと」から転じて、映画・ドラマ・漫画・アニメなどで「物語の舞台となった地」や「スポーツの名勝負の舞台となった地」を実際に訪れることを指すようになった。

さらに、昔によれば、女性誌におけるパワースポット特集以前にも、パワースポットの記事は散見されるが、ここではパワースポットの効果や発見方法が中心に述べられており、具体的なパワースポットの紹介は副次的な扱いだった。また、パワースポットの語も、読者にとり一般的ではない前提で書かれていた。

それが一般化するにつれ、女性誌では「幸運・開運、元氣、癒しをもたらしてくれる場所」とし

て期待されるようになり、神社が多く取りあげられるようになったという。このような変化は、先ほど述べたパワースポットの定義の変化とほぼ一致する。

3. ブームの背景

このような「パワースポット・ブーム」の背景には、「スピリチュアル・ブーム」が深く関わっていると考えられる。「パワースポット」はまた、「スピリチュアル・スポット」ともよばれてきた。二〇一〇年（平成二十二）九月九日の『朝日新聞』（朝刊、徳島全県一地方）には、「スピリチュアルカウンセラーの江原啓之氏や手相占い芸人の島田秀平氏たちが（このブームの）火付け役」とあり、「スピリチュアリティ」と「パワースポット」の密接な関連が窺える。

「スピリチュアリティ」の定義は多様である。しかしながら、スピリチュアリティ研究を進める宗教学者の榎尾直樹によれば、「一般的には（スピリチュアリティは）『精神性』や『霊性』と訳され、不可知・不可視な存在と神秘的なつながりを体験することにより、内面が高められ、心が成長する感覚であるといわれる。また、それは個人の経験に焦点を置いて語られやすく、制度的な宗教とは無関係なものとして扱われることが少なくない」という^②。

同じく宗教学者でスピリチュアリティ研究者の堀江宗正は、「現代日本の大衆レベルでのスピリチュアリティは、西洋のオカルト思想やニューエイジ思想と、従来から日本にあった民俗宗教との

融合という面が大きい」とし、そういったものに興味がある人は、「教団にコミットするよりも、『宗教』とは無関係だとうたう組織のイベントに、その場限り、一時的に関与する」と述べている⁽³⁾。

宗教的色合いを脱した「パワー」という用語へ

そして、その担い手は、今や若者ではなく中高年の女性が多く、彼女たちは「若い頃から占いに親しみ、仕事の疲れから癒しに触れ、ヨガを学び、パワースポットを旅するという、徹底的に消費化されたスピリチュアリティ」を志向・体験すると論じている⁽⁴⁾。

また、「現在、『スピリチュアル・ブーム』は『パワースポット・ブーム』に移行」していると述べている⁽⁵⁾ことから、「スピリチュアル」という宗教色を感じさせる用語が、より宗教的色合いを脱したようにみえる「パワー」という用語へと変わったことがわかる。

このように、教団や制度との完全なコミットメントを望まない、個人主義的な「スピリチュアル・ブーム」は、「パワースポット」にゆるやかな集団として個々人が集まり、そこを一過性のものとして観光し、またちりぢりに解散していくという、現在のツーリズムの動きに影響を与えているとみなせる。

4. 特徴の分析

筆者は昨年、NHKBS・hの番組「新日本風土記スペシャル 縁を結ぶ国 につぼん日

本」(二〇一一年一月三日放映)の企画に携わる機会をもった。

当番組で取り上げられたパワースポットは、箱根の九頭龍神社、京都祇園の安井金毘羅宮、群馬県太田市の満徳寺、島根県の出雲大社、福井県若狭の梅丈岳、神戸市の諏訪山公園、江の島の恋人の丘、東京大神宮などであった。

これらからも分かるように、パワースポットと呼ばれる場所は神社や山岳など、古くからの聖地が多い。だが、伝統的な聖地であっても、婚活や恋愛、アニメの聖地など、新しい意味付与がなされる場合も少なくない。

昨年四月に初めて開催された、沖縄県の伝統的聖地(世界遺産を含む)を自転車で回るイベント「ecoスピリットライドin南城市」(主催・沖縄タイムス社)でも、「スピリチュアリティ」の高まりが期待されるようなイベントのネーミングがなされ、琉球王朝に関係する神話的・歴史的な場所を巡拝する慣習(東御廻り)を現代のツーリズムとして活用し、そこにエコロジーやスピリット、癒し、統合医療などの新たな意味を付与していることが見てとれる(写真1)。

それらとは別に、先に挙げた神戸市の諏訪山公園や江の島

の恋人の丘など、現代になって新しく創造された聖地もある。筆者が現在調査している沖縄県南城市でも、久高島と斎場御嶽を結ぶ中間地点に、「パワースポット」と書かれた看板が掲げられていた⁽⁶⁾(写真2)。これは、新たな聖地創造の一例といえる。

さらに、これらの「パワースポット」は、前述したマス・メディア、あるいは旅行業者など、外部者により意味付け・紹介がなされたものと、神社の神主や地方自治体など、内部者により意味付け・紹介がなされたものとに分けられる。そのいずれもが意図的で計画的な宣伝・集客である。

一方、口コミで広まるなど、その仕掛けが無意図的で非計画的な場合もある。昨今の「パワースポット・ブーム」には、このように内部者と外部者、意図的で計画的なものとは無意図的で非計画的なものという両側面があり、それらが相互補完的に当ブームを作り上げているとみなせる。



写真1 斎場御嶽 (ecoスピリットライドin南城市)



写真2 南城市 パワースポットの看板

また、伝統的巡礼と同じく、パワースポットの巡礼には、訪れる場所が単数の場合と、複数の場合がある。アニメの「聖地巡礼」の動きからも分かるように、最近では、単数から複数へとめぐるスポットが増加していく傾向が見られる。さらに、京都祇園の安井金毘羅宮のように、以前は呪いという負のパワーが満ち溢れたとされる場所も、今、一種のパワースポットとして注目されていることにも留意したい⁷⁾。

現在、これらのパワースポットに関連して出てくるキーワードは「癒し」をはじめ、「ヒーリング」、「セラピー」、「総合医療」、「救済」、「縁結び」、「蘇り」、あるいは「パワーフード」や「パワーグッズ」などである。

確かに、そこにはパワースポットの消費化が見られるものの、決してお手軽とは言えない「総合医療」や「救済」、「蘇り」といった概念などとも関連付けられている。従って、昨今の「パワースポット・ブーム」には、単なる消費を超えた、より深いスピリチュアルなものへの探求志向も見られるのではないだろうか。

おわりに： 「パワースポット」をめぐる今後の課題

これまで述べてきたように、従来の伝統的聖地が「パワースポット」とよばれることで、新たな意味付けがなされたり、自分の好きなアニメや映画、小説等に関係のある場所をめぐるなど、「私的聖地巡礼」ともいうべき新しい巡礼の形が誕生したりすることは、個人が自由に「聖地」、あるいは「パワースポット」とみなす多様な場所を回

ることができる機会の到来、と捉えることができる。

そもそも聖地のパワースポット化は、ある場所をめぐるイメージの編集といった場所の再表象戦略⁸⁾でもあり、忘れられた場所や普通の場所が「パワースポット」となったり、新たな巡拝路が創造されたりしている。

さらに、たとえば「熊野セラピー」という観光プログラムでは、セラピストとして地元ガイドが観光客を案内し、瞑想や五感エクササイズなどをおこなうなど、「スピリチュアリティ」を重視した地元ガイドの雇用・育成も進められている⁹⁾。

観光業に新たな可能性を与える

このように、「パワースポット・ブーム」は観光業に新たな可能性を与えるもの、とみなすことができる。それと同時に、聖地のパワースポット化はまた、地元の人々による文化表象の機会を提供する。パワースポットの観光資源化は、文化表象創出の契機となるのである。

たとえば、沖縄における聖地の観光化は近代化・本土化の表れでもあるが、沖縄ではそれを自らの文化表象創出の機会と捉えている面がある。

先に見てきたように、斎場御嶽のある南城市では、スピリチュアリティと従来の民俗宗教を接合させ、伝統的な聖地巡拝慣習などを活用しながら、新たな聖地巡拝文化を生み出している。そしてそれが「霊位の高い、パワースポット沖縄、南城市」というイメージの創出にもつながっているのである。

現在、観光分野では、地元を重視した着地型観

光を奨励されている。このような側面からも「パワースポット」は貴重な地域資源であり、そのブームを一過性のもので終わらせないためにも、ホストにもゲストにも利する、単なる経済効果を超えた精神の深みに到達するような魅力ある観光振興政策を打ち出していくことが、今後の課題となるだろう。

〈注〉

- (1) 菅 直子二〇一〇「パワースポットとしての神社」石井研士編『神道はどこへいくか』二三二―二五二頁ぺりかん社。
- (2) 櫻尾直樹二〇〇五「スピリチュアリティ」井上順孝編『現代宗教事典』二九五頁弘文堂。
- (3) 堀江宗正二〇一一『若者の気分 スピリチュアリティのゆくえ』岩波書店一三〇―一三二頁。
- (4) 前掲書一六五頁。
- (5) 前掲書一三八頁。
- (6) この看板は、二〇一一年八月十三日現在の調査では見当たらなかった。南城市の観光協会の方に理由を聞いたところ、風雨で傷んだので撤去されたとのことであった。
- (7) ただし、現在は愛人が妻を呪うなどという、ブラックマジックの側面は薄れ、悪縁を断ち切るという、よりポジティブな場としての認識に移行している。
- (8) 岡本亮輔二〇一一「聖なる観光地―宗教ツーリズムからみたパワースポット―」日本宗教学会研究大会(二〇一一年九月四日開催)のレジュメ参照。
- (9) 天田顕徳二〇一一「現代の聖地にみる「癒し」と「蘇り」―熊野セラピーを事例に―」日本宗教学会研究大会(二〇一一年九月四日開催)のレジュメ参照。

縄文時代の姿を残す大湯環状列石

―鹿角市の観光の重要な素材の一つに―



鹿角市役所産業部観光交流課 主事

● 高杉賢吾

北東北の中心に位置する秋田県鹿角市は、秋田名物「きりたんぼ」発祥の地であり、十和田八幡平国立公園を有する自然豊かなまちである。

ユネスコ無形文化遺産の「大日堂舞楽」や日本有数の祭囃子である「花輪ばやし」などの伝統行事、八幡平温泉郷・湯瀬温泉郷・大湯温泉郷といった多種多様な温泉、大湯環状列石や史跡尾去沢鉱山に代表される歴史の重みを感じる史跡。そして、ふるさとの温もりを感じる特産品等々、魅力満載のまちである。

昭和6年に発見された大湯環状列石

このうち、大湯環状列石は昭和六年に発見され、昭和二十六、七年に現在の文化庁が発掘調査を行い、昭和三十一年に国特別史跡に指定された。

「大湯環状列石」は、鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂にある環状列石とこれを中心に広がっている掘立柱建物や土坑などの遺構群を含めた、全体を表わす名称であり、個々の環状列石を呼ぶと

きは、「万座環状列石」「野中堂環状列石」と言う。遺跡の名前は、見つかった土地の小字名を付けるのが通例だが、大湯環状列石は当時の町名（大湯町）と、その構造や形態を組み合わせた珍しい例である。

環状列石は、十数個の川原石を楕円形や円形・方形に石を並べた「配石遺構」と呼ばれる遺構の集合体で、最も形の整った「日時計状組石」は各々の環状列石内にある。列石に使用される石の数は約七千二百個で、その九割以上が「石英閃緑玢岩」と言われる石で占められ、列石から約六キロメートル離れた安久谷川からわざわざ運び上げている。

万座と野中堂環状列石の配置を見ると、各々の中心と日時計状組石が一直線に並んでおり、この方向は「夏至の日没」を向いている。また、万座には石の原産地である諸助山を意識した石の列もあり、縄文人は太陽の動きや列石作りに係る場所を風景にとり入れながら列石を作っていたことがうかがえる。

列石の周りからは、多量の土器や石器、石製品

や土製品が出土している。土器には派手な装飾把手を付けたものや赤色顔料を塗布したもの、土製品には土偶、土版、鐔形土製品や動物・キノコの形をしたものがある。土版は人の形を簡素に表したもので、口や目、乳房を小さくぼみで表現しているが、そのくぼみを数えていくと一から六の数を表わしており、すでに縄文時代には数字の概念があったことが分かる。

環状列石はお墓の集合体で、その周りの掘立柱建物で葬送儀礼が行われていたと考えられている。また土製品や石製品には、日常では必要としないものや自然を意識した形のものがあることから、列石の周りで自然に対して畏敬の念を表わすマツリや祈りも行われていたと考えられている。

全国各地で遺跡の復元整備が行われているが、二つの環状列石は縄文時代当時の姿のまま展示し



大湯環状列石の日時計状組石



「大湯ストーンサークル館」の内部



縄文時代に数字の概念があったことを証明する土版

ており、縄文人の息吹を直接感じ取ることができ、数少ない遺跡である。

観光資源としての「大湯環状列石」

近年のパワースポット・ブームで、大湯環状列石にも多くの方が訪れている。予約すれば無料の史跡ボランティアガイドの案内で、大湯環状列石をより楽しむことができる。

また、大湯環状列石のガイダンス施設である「大湯ストーンサークル館」には、出土品の展示、世界の巨石記念物を紹介するコーナーもあるほか、土器やペンダントづくりなども楽しめ、親子連れや小・中学校の修学旅行の体験メニューとしても

人気である。

鹿角市は、東日本大震災の影響により修学旅行が中止となった被災地域の小・中学校の修学旅行を受け入れる「癒しの学び旅事業」を実施し、この事業でも生徒が大湯環状列石を訪れ、縄文文化についての学習や体験を通して見聞を広めた。

また大湯環状列石は、ユネスコの文化遺産暫定リストに登録された「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の中でも重要な位置を占める構成遺跡となっている。現在、講演会や史跡見学会、縄文を体験できるイベント等を通じて縄文文化の魅力と世界遺産登録への関心や機運を高める活動を展開している。

さらに、近くに黒又山（通称クロマンタ）と呼ばれる四角錐形の山があり、その形がピラミッドを彷彿とさせる。各地に伝わるピラミッド伝説の代表として唯一学術的調査が行われており、その結果、手が加えられた形跡があり、階段状のピラミッドだと考える人もいる。

数々の未確認飛行物体の目撃例もあることから、ミステリー好きにとっては大湯環状列石とともにロマンを掻き立てられるパワースポットとされている。

観光客の動向と今後の課題

鹿角市の観光の現状は、東日本大震災後の風評被害等の影響もあり、観光客は十月末現在で前年比一二%減と苦戦している。さらに滞在型観光から通過型観光へ、団体旅行から個人旅行へと変遷している中で、多様なニーズに対応した旅行商品

の開発が求められている。

その対策として、「着地型旅行商品」の開発を進めており、鹿角市の魅力でもある「自然」「温泉」「歴史」「食」等を活かした体験型観光や交流居住、冬期観光メニュー等を造成し、時代の流れに即した事業を展開している。

また、鹿角市と観光分野で様々な協力体制をとっている小坂町及び秋田県鹿角地域振興局との間で、これまで以上の連携強化を図ることを目的とした「鹿角広域観光推進会議」を設置。岩手県盛岡市や八幡平市といった四市七町一村からなる「盛岡・八幡平広域観光圏」にも参画しており、県内外を問わず広域観光にも力を入れている。

さらに、J R及び指定された自治体や観光事業者等が協同で実施する大型観光キャンペーン「デステイネーション・キャンペーン（通称DC）」が平成二十三年四月～七月の青森DCを皮切りに、平成二十四年四月～六月のいわてDC、平成二十五年十月～十二月の秋田DCと、三年続けて北東北で開催される。

鹿角市は北東北の中心に位置する立地を活かして、いわてDC、秋田DCのどちらにも参画している。このチャンスを逃さぬためにも、連携の強化、受け入れ態勢の整備、情報発信の充実など、求められる課題が多いことは事実だ。

「大湯環状列石」が歴史文化の面で鹿角の観光に寄与していることは間違いない。様々な事業を展開していく中で、パワースポット＝湯環状列石を鹿角観光の重要な素材の一つとして、さらに魅力を磨き上げることが今後の鹿角の観光振興に必要である。

龍泉洞内の地底湖に安らぎと感動 —観光低迷と被災の影響から復活の先導役に—



岩泉町経済観光交流課 主査

● 小野寺貴幸

日本三大鍾乳洞の一つ「龍泉洞」

岩泉町は岩手県の東北部に位置し、西は北上高地から東は海岸部までの東西五十一キロ、南北四十一キロにわたる本州随一の広大な町である。

北上山系より分岐する標高千級級の急峻な山々に囲まれ、総面積の九四％は山林原野で、これらの山々を源として三つの河川（小本川、安家川、摂待川）が東流し、太平洋に注いでいる。

この岩泉町内にある「龍泉洞」は、山口県の「秋芳洞」、高知県の「龍河洞」とともに日本三大鍾乳洞に数えられ、洞内に棲むコウモリとともに国の天然記念物に指定されている。

洞内はすでに知られている所だけでも三千百メートル以上あり、そのうちの七百メートルを公開している。現在も調査が続けられているが、その全容は五千メートル以上に達すると推定されている。

その奥から湧き出る清水が数カ所にわたり深い地底湖を形成している。中でも第三地底湖は水深

が九十八メートル、第四地底湖（未公開）は百二十メートル日本一で、世界でも有数の透明度を誇っている。

龍泉洞入口の向かい側にある龍泉新洞科学館は、昭和四十二年（一九六七年）道路拡幅工事の際に発見され、翌年には遺跡も発見された。

洞内から出土した多数の土器・石器などを中心に、洞穴学・地学・生物学・考古学等の貴重な資料や標本を洞内に展示した、世界で初めての「自然洞穴科学館」として二百メートルが公開されている。

また龍泉洞と併せて、学術上の大切な研究・調査対象になっている。

岩泉町営となり50年の節目

昭和三十四年から、龍泉洞保存会によって経営してきた龍泉洞が、昭和三十六年四月一日からは岩泉町営となり、平成二十三年が五十周年の節目の年となった。

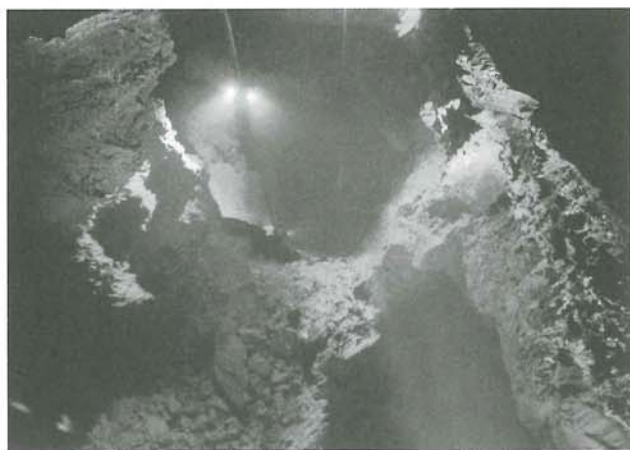
五十周年を迎えるにあたり、老朽化が進んでいた電気設備を一新し、LED照明に改修した。

このことにより、放射熱・紫外線の発生量を抑えることができ、より自然に近い洞内環境が維持できる。また消費電力が少ないことで、地球環境にも配慮したものであると自負している。

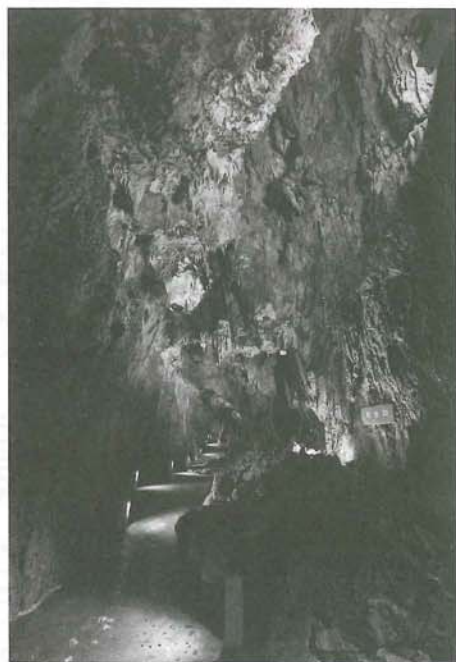
この改修により、何万年もの歳月をかけて造られた自然の造形美である龍泉洞を、未来に向けて永続的に維持できるようになった。

観光客が減少する冬期間ではあるが、龍泉洞の中の気温は年間を通じて摂氏一〇度前後であるため、外気温より洞内が暖かく感じる季節となる。また、龍泉洞の奥から湧き出る水量が落ち着く季節となるので、透明度の高い地底湖を見られる季節でもある。

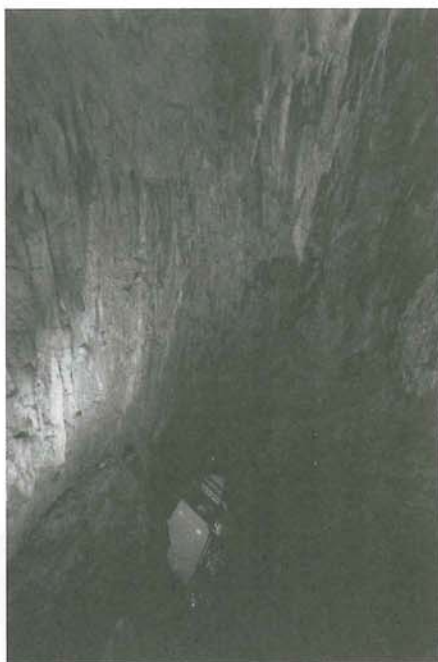
龍泉洞内の地底湖は、季節や天候によってその色合いを変化させる。「ドラゴンブルー」と呼ばれるこれら地底湖は、パワースポットの要素が



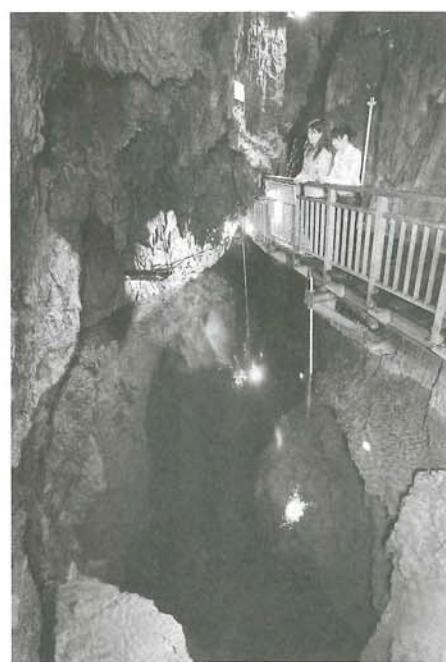
水深98mの透明度を誇る第3地底湖



ライトアップされた月宮殿^{びつきやうでん}



第一地底湖と展望台



第2地底湖

あるのか、訪れた観光客など見る者に安らぎと感動を与えている。

冬期間の誘客対策として、この龍泉洞内を地図に書かれた暗号を解き進み、宝箱の鍵を探す「龍泉洞大冒険」といった企画イベントを開催し、子どもはもちろん、大人にも十分に楽しんでいただいている（龍泉洞大冒険は、十二月二十三日～三月三十一日まで開催。前日までに要予約。通常の観覧料が必要）。

最近の観光客の動向、町の経済への影響

龍泉洞への観光客数は、高速大量輸送時代とともに増加し、昭和六十年代には四十七万人を超え、岩泉町全体への経済効果も多分にあった。

しかし、国内観光需要の落ち込みと観光ニーズの多様化により、近年は年間で二十万人台まで減少している。そして、昨年三月十一日に発生した東日本大震災が追い打ちとなった。

幸いにも、龍泉洞内の鍾乳石や施設の被害は全くなかった。しかし、周辺の観光施設の被害は甚大である。龍泉洞だけ何事もなかったようにオープンするわけにはいかない。

龍泉洞だけでは当地域の観光が成り立たない現実がある。それから一カ月半後、龍泉洞はようやくオープンすることができた。しかし、オープンしたのはもの、お客

様の足はまだ龍泉洞へは向かないようで、昨年の三割程度しかお越しいただいておらず、厳しい状況が続いている。

龍泉洞の水を活かした町の産業もあるが、「龍泉洞の水」をはじめ、関連商品の売り上げは現在のところ厳しい状況にある。これは、①大手メーカーとの価格競争、②震災直後に流通がストップし、納品できなかったこと、③福島原子力発電所問題の影響——なども原因と考えられ、昨年比で八割程度の売り上げにとどまっている。

最近では、「被災地復興フェア」などでの売り上げが好調ではあるが、個人消費者の購買意欲は、落ち着いた感があるにとらえている。

岩手DCを機に盛り返したい…

三・一一大震災以降、北東北への観光が控えられている感はまだまだあるが、町としては落ち込んでばかりはいられない。

平成二十四年四月から六月に行われる「岩手デイスティネーションキャンペーン（DC）」を機に、岩泉町「龍泉洞」がこの岩手県沿岸地域の先導となって、踏ん張らなければならないと考えている。

岩手DC期間中の五月三～五日には、今年も「龍泉洞まつり」が開催されるほか、様々なイベントを企画している。この機会に岩泉町の「龍泉洞」を訪れていただき、北東北へ、岩手へ、皆さまの「元氣」を与えていただきたい。

*問い合わせ 龍泉洞事務所まで（0194-2212566）

「東国三社」詣ツアーに舟運も活用 —パワースポット人気追い風に観光盛り返しへ—



息栖神社禰宜
元神栖観光協会会長

● 荒井昭男

茨城県神栖市は、県の東南端に位置し鹿島灘と利根川に面した地域で、昭和三十年代から始まった鹿島開発により鹿島臨海工業地帯の中核となり、息栖神社を始めとする歴史と、コンビナートで栄える産業の街である。

息栖神社は、古くより同県鹿嶋市の鹿島神宮、利根川をはさんで千葉県香取市の香取神宮とならび「東国三社」と称され、江戸時代には東国三社への参詣は「お伊勢参りの禊ぎの三社参り」と呼ばれるほど篤い信仰を集めた。

かつては大賑わいだった息栖河岸

茨城と千葉の県境、水郷と呼ばれるこの一帯は利根川、常陸利根川、霞ヶ浦、北浦などを中心とした水の豊かな情緒溢れる土地である。かつて、利根川の舟運は物資の輸送に役立っていただけでなく、旅行者にも大いに利用され、この息栖河岸にも東国三社参詣の人々や下利根川地方遊覧の人々が各地から押し寄せ、大変な賑わいを見せた。

これらの人々を乗せて、利根川を上下したのが「木下茶船」と呼ばれた乗合船・遊覧船。木下河岸から船出する船は、江戸中期には一日平均十二艘、年間一万七千人余りが利用したという。

そもそも息栖神社の創祀は第十五代応神天皇の御代と伝承されているが、御祭神「久那戸神」のご神格からして出雲より鹿島・香取の神々をご案内されて東国に至り、建国の大儀を果たされた後に鹿島・香取の神々はそれぞれ現在の地に鎮座され、久那戸神も同時代に海辺の要所日川の浜に鎮座され、社に祀られたと推定される。

また湧水の豊富な日川は、井戸の神である久那戸神にとって理想的な鎮座地であったと推測され、鹿島・香取・息栖を結んだ線は御鎮座当時、正三角形をなしていた。延暦十八年八月に発生した大地震と大津波のため、第五十一代平城天皇の御代に勅命を受けた右大臣藤原内膳により現在地に御遷座されたと伝承されるが、現在の鹿島・香取・息栖を結んだ線もまた、ほぼ直角二等辺三角形を描く。

「東国三社」のトライアングルに 魅かれて訪れる観光客

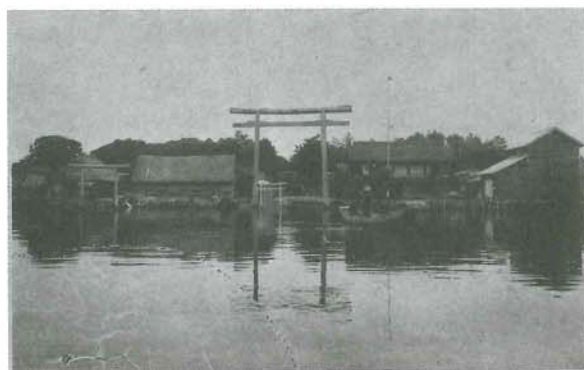
昨今、古代史跡や聖地が直線上に配置されているという「レイライン」なる概念があるが、この東国三社のトライアングルにも神秘的なものを感じるといふ観光客が少なくない。

応神天皇により奉納されたと伝えられる忍潮井（男甕・女甕）は、久那戸神の御遷座によって日川の入江に取り残されてしまい、神のあとを慕って男甕、女甕は三日三晩泣き続け四日目の朝、自力でとうとう息栖河岸の大鳥居の傍にびたりと据え着いたが、時々日川が恋しくなると泣いた、という伝説が残されている。

この懐かしい伝説も、鹿島開発による河川改良・用地造成事業等で陸に据えられた男甕、女甕の湧水量は水中にあった当時のわずか十分の一くらいになった

が、日本三霊泉（伊勢国朝熊山の曙の井戸・伏見の直井・常陸の忍潮井）の一つと言われた、常陸の忍潮井は今もなお健在である。

数年前に



大正十年当時の息栖神社



現在の息栖神社



一の鳥居の両側にあるのが忍潮井の男甕・女甕



今も霊泉として湧水する忍潮井

そこで、こういったパワースポットやスローライフという新しい文脈の中での取り組みで、息栖神社、そして神栖市をいかに魅力あふれるコンテンツにし、観光客を呼び込んでいくかが私たちのこれからの課題である。

…幸せを呼び込むパワースポットへ！

忍潮井の近くに住む私は、時々異常なパワーを感じることがあったが、最近パワースポット研究のスペシャリストなる女性の方が来られ、神社拝殿の前と男甕と女甕の中間点、一の鳥居の下が最も強いパワーと清々しさを感じられるとして次のように述べた。

「体内の邪気を深呼吸することにより、悪い気

観光協会のHPで 息栖神社の閲覧数増える

全国に報道され話題となった、戦後の不正な残土処理による神栖市内の飲用井戸水ヒ素汚染が神社近隣で発生し、周辺で最も海拔が低い息栖地区にも地下水の汚染が危惧された。しかし、最近の市によるモニタリングの結果、地下水が神社境内の直前でUターンし、高台側の別方向に変わり、汚染濃度もゼロになっていることが判明。まさしく井戸の神のご守護である。

を吐き出し、悪運も一緒に持ち去ってもらいます、同時に道案内の神でもあるので先見のパワーも授かります、非常に強いパワースポットです」と。

昨今、この「パワースポット」という新しい言葉がメディアを賑わせているが、市観光協会のホームページでも息栖神社を「神栖のパワースポット」として取り上げたところ、ホームページ内での閲覧数では常に上位に位置するなど、非常に多くの皆さんに閲覧していただいている。

最近ではパワースポット人気にあやかっ「東国三社」をバスで巡るツアーなども多く企画されるようになっていく。

かつて舟運や東国三社詣でで栄えていたこの利根川の河岸も、その後の鉄道の開通や自動車交通の発達により次第に廃れていったが、昨今のスローライフへの注目から舟に対する見直し、そして舟運の復活による地域活性化・地域連携が考えられるようになり、平成二十年度に利根川下流域

新しい文脈の中で魅力ある 観光コンテンツづくりを

十九市町村が「利根川舟運・地域づくり協議会」を設立した。「地域の元気再生事業」によりさまざまな舟運社会実験や河川空間を利用したイベントを実施しており、神栖市も協議会構成市町村の一つとなっている。

この協議会の開催による「小舟とバスで巡る東国三社詣モニタリングツアー」では、通常バスのみで巡る東国三社詣での行程に舟を取り入れ、参加者は車上からは味わえない、昔の旅の情緒を堪能した。

この東国三社の中でも息栖神社は、鹿島・香取両神宮に比べ知名度が低く、また観光資源の乏しいこの神栖市も、鹿島神宮・鹿島アントラーズで有名な鹿嶋市や、あやめ・潮来花嫁さんの潮来市、犬吠崎や銚子電鉄の千葉銚子市などの隣接する

地域と比較しても、観光地としてのまちおこしは現状ではまだまだ発展途上である。

そこで、こういったパワースポットやスローライフという新しい文脈の中での取り組みで、息栖神社、そして神栖市をいかに魅力あふれるコンテンツにし、観光客を呼び込んでいくかが私たちのこれからの課題である。

弥彦神社のパワーで観光客を元気に！ — 弥彦温泉の活性化策で浮上したアイディア —



弥彦観光旅館組合

● 白崎純也

「弥彦には、県内のどの地域にも絶対に真似できない素材がある。彌彦神社という県内最大級のパワースポットを活かさない手はない！」——。その瞬間は突然やってきた。

この言葉を口にした私には、確かな確信があった。パワースポットというコンセプトなら、もう一度「弥彦」という名前を全国に発信できると。この自信の裏には、ある著名人とお会いした時に聞いた言葉があったからだ。

二〇〇七年、私の営む宿に東京から雑誌社の方が取材に訪れた。その中にいた方が、スピリチュアルカウンセラーとして有名な江原啓之さんだった。江原さん自身、幼少期の頃から連れていかれていたという彌彦神社。そんな思い出をうかがっていた際に言われた「白崎さんは気づいていないと思うけど、弥彦神社には凄いパワーを感じますよ」の一言だった。

この言葉がパワースポットなどに一切興味がなかった私に衝撃を与えたことを今も覚えている。

年間二百五十万人の参拝客で賑わう弥彦神社だが…

越後平野にそびえる霊峰弥彦山。その麓には越後一宮の彌彦神社がある。祭神は越後の国の産業文化を振興した天香山命あめのかやまのみことで、商売繁盛や合格祈願などの御利益を求め、年間約二百五十万人の参拝客で賑わっている。また、あまり知られていないが、明治時代に本県が日本一の石油生産県になったことから、掘削安全祈願に訪れる人も多く、全国でも珍しい「石油の神様」でもある。

天香山命は紀州熊野（和歌山県）のご出身で、今から千三百年ほど前に越の国の米水浦（新潟県三島郡旧寺泊町野積）に上陸された。その後、弥彦山の麓に住まれ弥彦を拠点に、越後の国づくりに尽



弥彦神社の末社の「湯神社」



弥彦神社御神廟（奥宮）

力された…と言い伝えられている。

現在、地元住民からは「おやひこさま」という呼称で広く親しまれ、信仰されている。私が弥彦村で営む宿の屋号（四季の宿みのや）からも見て取れるとおり、古くから弥彦に住居を構える人の中には、尾張ノ国や美濃ノ国から「おやひこさま」と共に移り住んだ先祖をもつ方も少なくない。

彌彦神社の門前には古くから温泉街が栄え、現在には十二の宿が軒を連ねている。二〇〇七年秋、新源泉を掘削し待望の源泉掛け流しで温泉を提供できるようになった。しかし、簡単には不況の波を打ち消すほどの効果を上げられないまま迎えた二〇〇九年冬、弥彦温泉旅館組合の若手で月例会が行われた。

毎年、この時期になると決まったように持ち上る弥彦温泉の課題。それは一年で一番閑散期になる春季対策。本来であればお花見、歓送迎会などで、宿は忙しいように思われがちであるが、残念ながら現状は違う。現状を打開するような新し

いアイディアはなかなか出てこない。そんな時に
出たのが、冒頭の言葉だった。

温泉組合で五本柱のプロジェクト

二〇〇九年の冬に開催された月例会が転機になり、私たちは二〇一〇年春、弥彦観光の活性化を図るべく「弥彦温泉パワースポットプロジェクト」

を満足させた。そこからは毎日が打合せや会議の連続で、数カ月間は休みなく活動した。

プロジェクトを進める上でのテーマは「弥彦に
来た人を元気にさせる！」である。また、プロジェ
クトの活動を具体化すべく五本柱を打ち出した。
パワースポット、パワースパ、パワーフード、パ
ワーゲッツ、パワーツアーの五つ。

女性客やカップルが増えてきた

最後の五つ目はパワーツアー。弥彦ぼらんでいあガイドさんにご協力いただき、彌彦神社パワースポットツアーという新しいガイド付きコースを有料（一人五百円）で設定した。彌彦神社境内にある宝物殿の入館料とお土産屋で売っている弥彦の定番「こんにやく」をセットにしたものだ。

今まで年配のお客様が中心だった弥彦温泉に若い年層から中年層までの女性やカップルが訪れるようになった。行列の絶えない火の玉石や彌彦神社、女性グループやカップルのご利用が増えた旅館。特に卒業旅行という、今までさほど目立たなかった新しい層のお客様も獲得できた。

週末以外でも満席状態になる日が多々出始めた。飲食店、入荷待ちの物もあるパワーグッズ、以前にも増して出勤機会が増えたぼらんでいあガイドなど、今までの弥彦にはなかったムーブメントも起きている。

一方で今後の課題として、長引く不況にさらなる追い打ちをかけたリーマンショックや東日本大震災の影響で、比較的高額単価の旅館業などは今後も厳しい環境が続くと思われる。パワースポットという利点を活かしつつ、さらなる進化が弥彦には求められていると感じている。

そして、まず受け入れ側の私たちが今まで以上に元気になることが、本プロジェクトのテーマである「弥彦に來た人を元気にさせる!」を実現する上で、最も重要なものと考えている。

弥彦 **パワースポット** MAP

霊峰京恵山、古来から人々の信仰を聚めてきた御岳神社、そして門前町として賑わった強彦のまち。その地に足を踏み入れたとき、あなたはどんなパワーを感じ取るでしょう。まぎず静かに、その美しさと荘厳さを素直に受け入れてみましょう。

そこから、パワースポットの峰は始まります。



弥彦パワースポット地図（弥彦山頂の標高=634mはスカイツリーと同じ高さ）

二つ目はパワースパ。二〇〇七年に掘削した源泉「湯神社温泉」をもっと活用して、利用客の皆さんに癒やしを提供していくというもの。従来にも増して日帰り入浴プランを企画した。

三つ目はパワーフード。温泉街に点在する飲食店さんにご協力いただき、食べた人を元気にさせることをコンセプトにしたメニューを開発。また、完成したメニューの販売を強化するためプロジェクトの中で飲食店のメニュー表も作った。

四つ目はパワーグッズ。弥彦おかみ会の協力で神社の鳥居をモチーフにした巾着袋や手ぬぐいなど小物の開発をした。また、御利益アイテムとして旅館組合では厄払いをするためのミニ簪（ほうき）も合わせて開発した。

分杭峠の「ゼロ磁場」にリピーター —観光振興と交通規制、行政は一線引いて対応—

伊那市長谷総合支所産業振興課

中国人気功師が平成七年に発見

分杭峠は、長野県伊那市長谷と下伊那郡大鹿村との郡境にあり、文字通り杭で峠を分けている。海拔は千四百二十四メートル。峠には「従是北高遠領」と書かれた石柱が立っていて、古くから高遠藩（桜で有名な伊那市高遠町）に属していた。

また、秋葉街道（静岡県浜松市の秋葉神社へ参拝するための古道）の峠の一つであり、国道152号の峠の一つでもある。日本最大、最長の大断層、中央構造線が国道152号、秋葉街道に沿っており、その断層上に位置している。

断層では拮抗する力の均衡により、互いに押し合うことで巨大な力が相殺し、ゼロ磁場ができると言われている。発見者は、世界的に有名な中国人気功師の張志祥師で、平成七年七月二日、駒ヶ根市内でのセミナーへ参加の折、分杭峠に立ち寄り発見に至った。

他の場所と違い「気場」の目印がない

パワースポットは「気場」「ゼロ磁場」とも言われる（以後、気場とも表現）。「気」については目に見えない、写真などで写らない、形も分らない——などの理由で、存在自体が解明できない。このため、行政としては一線を引いた対応をしており、その表現などは断定せず、「……と言われています」などと表現している。

分杭峠の気場は、他の場所と違い目印が全くない。神社、仏閣のような建物や、巨石、巨岩、巨木などもない。ただ自然の中で、四季の移り変わりがあり、静かにたたずんでいるのみである。

あるラジオ局のパーソナリティーのKKさん曰く、「電気のように指先にビリビリッと感じる場所。身体がフッと軽くなるように感じられるところや、身体が圧迫感を受ける場所があり、地球が生きていることを感じられる場所」（むろん、個人の感想なので、全員同じように感じるわけではない）。

はない。

そう言えば、お笑い芸人のSSさんの影響と思われるが、リピーターの中で若い男女が増えている。開運・好運などを求めて、特に若い女性が増えてきているような気がする。

平成十五年ごろ、テレビ番組の影響で分杭峠の「ゼロ磁場」に最初のブームが訪れたが、その時は一過性で、一カ月程度で終わった。しかし、身心に異常のある皆さまを中心に、リピーターは増えている。溺れるものは藁をも掴むとの思いで、遠方より来訪される方も同様に増えている。

観光振興とマイカー規制を並行

平成二十一年夏ごろから、クルマでの来場者が徐々に増え始めた。九月ごろからは、分杭峠へ通ずる国道152号で混雑が始まり、十月中旬の三連休に大渋滞が発生し、峠の通過に三時間も要したため職員を動員し、車の行き違いに便利な場所への誘導をするようにした。

しかし、交通誘導は違法性があるのので止めるべき」との指摘を受



分杭峠からの眺望



分杭峠の看板



人気スポットの一つ、通称“水汲場”

流水を使用しており、人氣がある（ただし飲用水ではない）。また、入野谷には通称「瞑想室」と呼ばれる人間的なゼロ磁場の部屋があり、積雪などで分杭峠へ行けない冬場は人氣を集めて

いる。もちろん、夏場も利用可能（但し予約が必要）である。

今後の観光面での課題

さて、今後の観光面での課題だが、まず集客数の減少が見られる。平成二十二年度は十万人を超えていたが、二十三年にはこれが激減し、五万人ほどになった。東日本大震災、高速道路ETC割引上限（千円）の終了、人気スポットの水汲み場への通路が土砂崩落のため通行不可となった、などの要因が挙げられる。ただ二十三年は、映画やテレビなどの撮影が多く、二十四年は再び集客数の増加が期待できる。

次に、首都圏と中京圏の中間に位置するため、日帰り者が多く、宿泊者が少ない点も課題である。現在、人氣の気場は二カ所、張志祥師発見の場所と通称「水汲み場」と呼ばれる場所である。分杭の谷には、他にも多くの気場が存在しているとされている。谷間は急峻で脆い地質であり、通路の整備が困難なことも課題の一つである。

別な角度から考えると、「氣」自体の存在である。科学的な解明が進んでいない現状であるが、個人的な感想の中に、ビックリするような病気の治癒例が寄せられている。腰痛、膝痛、肩こりを始め、最近はいづれにしても、早急な科学的解明が望まれるところだが、併せて分杭峠へ来られた皆さま方に好運・開運が訪れることを望むところである。

け、翌年からは混雑の解消、自然環境保護などへの配慮のために、シャトルバスを運行することになった。分杭峠へ通ずる国道152号は急峻で幅員も狭く、多くの車が往来できない道路である。かつ断層周辺独特の脆い地質で、峠周辺に駐車場を整備するのも困難である。

もちろん、道路への駐車も違法な場所がほとんどである。そんな状況下で、平成二十二年三月から分杭峠の麓、粟沢地籍に駐車場を整備し、そこを発着場として民間バス会社によるシャトルバスの運行が始まった。

まだまだ違法駐車は絶えないが、その排除も今後の課題である。また、駒ヶ根市側や大鹿村側からの来訪者もあり、その往来も視野に入れるべき課題であるが、シャトルバスの運行は、伊那市長谷の地域振興の一つとなっている。

ゼロ磁場の水を活かした商品開発

分杭峠麓の地下水は、非常に波動値の高い水である。お茶やコーヒー、各種アルコール類をマイルドな味にする。また、空気に触れないでペットボトルに封入するため、フィルターを通すのみで良く、消毒の必要がないので、カルキ独特の嫌な臭いは全くなく、先ず、水が最初の商品である。

続いて日本酒、焼酎、ビールなどのアルコール類。ドラ焼きの「氣ドラ」、煎餅の「氣セン」「あま酒」「氣の水まんじゅう」「氣そば」、ゼロ磁場の焙煎ガラス「氣の雫、氣の花、氣の光」や携帯用ストラップ、根付、ゼロ磁場クリスタルの「プレスレット、ネックレス」などである。

氣場発見後に建設された宿泊施設「入野谷」の入浴用のお湯は、氣を浴びたとされる粟沢川の伏流水を使用し

今後の観光面での課題

さて、今後の観光面での課題だが、まず集客数の減少が見られる。平成二十二年度は十万人を超えていたが、二十三年にはこれが激減し、五万人ほどになった。東日本大震災、高速道路ETC割引上限（千円）の終了、人気スポットの水汲み場への通路が土砂崩落のため通行不可となった、などの要因が挙げられる。ただ二十三年は、映画やテレビなどの撮影が多く、二十四年は再び集客数の増加が期待できる。

次に、首都圏と中京圏の中間に位置するため、日帰り者が多く、宿泊者が少ない点も課題である。現在、人氣の気場は二カ所、張志祥師発見の場所と通称「水汲み場」と呼ばれる場所である。分杭の谷には、他にも多くの気場が存在しているとされている。谷間は急峻で脆い地質であり、通路の整備が困難なことも課題の一つである。

別な角度から考えると、「氣」自体の存在である。科学的な解明が進んでいない現状であるが、個人的な感想の中に、ビックリするような病気の治癒例が寄せられている。腰痛、膝痛、肩こりを始め、最近はいづれにしても、早急な科学的解明が望まれるところだが、併せて分杭峠へ来られた皆さま方に好運・開運が訪れることを望むところである。

自然との共生をめざしたまちづくり

―御嶽山麓飛驒側「日本一滝の多い町」を活かす―



NPO法人飛驒小坂200滝理事長

● 桂川淳平

岐阜県の中央東部に位置する下呂市は、平成十六年三月に旧益田郡萩原町、小坂町、下呂町、金山町、馬瀬川の五町村が合併し誕生した市である。北東部に木曾川の源流である御嶽山を擁し、市の中央部を飛驒川が南下し、馬瀬川と合流して伊勢湾に注いでいる。

地域の九二%が森林で占められており、気候は山間内陸性の気候で気温の較差が大きく、年間降水量は二千四百ミリの超える。また、日本三名泉の下呂温泉をはじめとする温泉群や、御嶽山、清流馬瀬川など自然豊かな町である。

「小坂の滝めぐり」ができた経緯

下呂市小坂地域は、木曾ヒノキをはじめとする広大な森林や、清流小坂川、湯屋、下島、濁河温泉など御嶽山の恵みをたくさん受けている。

その中には、日本の滝百選に選定された「根尾の滝」がある。小坂の山中にどれくらいの数の滝が隠されているのだろうか、この思いから昭和五

十六年に「小坂の滝調査委員会」が発足。三年七カ月かけて諸先輩方が小坂地域の溪谷を調査したところ、五以上の滝が二百十六箇所（その後の調査で二百七十一箇所）も存在していることが判明し、文字通り「日本一滝の多い町」ということが分かった。

これを基に「小坂の滝」写真集が発行されて三十年余り、写真で見える限り、すばらしい滝があることは分かるが、活用されていなかった。お金をかけずに地域の特性を活かしながら活性化を図ることは、たくさんの滝を訪れることのできる「滝めぐりコース」を設定し、多くの方に見てもらったかどうかとの声が、以前から飛驒小坂観光協会などで上がっていた。

このため小坂町商工会が中心となり、滝の写真家でもある御厩野の和合正氏のアドバイスを受け、数回の現地調査を行い、十三の滝めぐりコースを設定した。

四つの初級コースは、市において歩道が整備されておりガイドがなくても滝めぐりができるよう

になった。中級コース以上（中級五コース、上級四コース）は、すべて国有林内にあるため下呂市とNPOとの「滝めぐり協定」に基づいて連名で岐阜森林管理署に入林許可申請を提出し、ガイドを伴った滝めぐりが可能になった。

しかし、コースを設定しただけでは意味がなく、コースの整備やガイドをどうするのかという課題もあることから、NPO法人を立ち上げた。

これに賛同する方を中心に滝めぐりの案内をすることとし、平成十八年の七月「NPO法人飛驒小坂二〇〇滝」を立ち上げ、小坂の滝めぐりの基盤ができた。現在正会員百五名、賛助会員三十二名で運営している。

滝めぐり活動

当法人の目的は、御嶽山麓のすばらしい自然を活用し、自然と共生しながらまちづくりをするのが目的である。その活動の中心は、都会に出ていった「昔の若者たち」が退職後、ふるさとを愛いUターンしてきた人たちがであり、生え抜きの者より熱心に活動している。

滝めぐり

コースの整備は、初級コー



天然記念物「巖立」高さ72m幅120m 御嶽山の溶岩流



初冬の御嶽山



「大釜の滝」落差7m 上流コース

スを除き中級以上は原則として「けもの道」を利用し、自然に負荷をかけなく、お金もかけず整備している。行政に対しては、「自分たちでできることは自分たちでやる」という方針で、すべてを頼らず原材料の支給を受けてボランティア作業を行っている。

ガイドの養成講座も閑散期に独自の方法で開催、月二回

中級コースを中心とした滝めぐりツアーや市民滝めぐりツアーを実施すること、活動を理解してもらうよう努力している



日本の滝百選「根尾の滝」落差63m

る。また、観光協会と連携し厳立音楽祭、アームレスリングと滝フェスティバル、いわな祭りなども行っている。

岐阜の宝もの「第一号」

そのような活動が認められ、「小坂の滝めぐり」が千二百四十点の応募の中から全国に通用する県民が誇るふるさとの自慢となる。岐阜の宝もの「第一号」として平成二十年八月認定された。認定の主な理由は、他を圧倒する大自然であることと、ガイドの組織がしっかりしているということであった。

滝めぐりのPRは、岐阜県や下呂市が一体となって行っているが、「厳立峡と滝めぐり」がパワースポットとしてマスコミに取り上げられ、女性雑誌「CREA」や、NHKが中部地方で放送する「中部夏紀行」などで紹介され、大きな反響を呼んだ。

また、JR東海の新幹線車内に「名瀑へ」と題したポスターでの宣伝もしていた。ただ、さらに一昨年には、岐阜県が上海万博で清流のすばらしさを前面にして「小坂の滝めぐり」を大々的に宣伝した。

これらの活動が地域経済などに与えた効果は、以下のような点であろうか。
・年間百万人の宿泊客があ

る下呂温泉とタイアップした滝めぐりツアーに取り組み、平成二十二年度には、五万九百七十九人が滝めぐりに訪れた。

・日帰りのお客様には、地元の「ひめしやがの湯」の利用をお勧めした。

・地元商工会では、全四版の滝写真を店頭に展示したほか、ポイントカードに滝の写真を入れるなど協力体制ができた。

・小中学生の自然保護ツアー、小学生の遠足やどろぐりを拾い育て植林して水の大切さを学ばせるなどの活動ができた。

今後の課題や展望

まだ始まったばかりの活動で、地域経済に与える影響はわずかだが、今後の組織運営や地域と一体となった活動がますます必要であると考えられる。また、JRの駅から交通手段がなく基盤整備、特に市道の拡幅や駐車場、トイレ整備等が必要であること、特徴ある土産品の開発、滝めぐりと宿泊とのセットの売り出しなどの課題がある。

自然保護という観点からは、滝めぐりツアーには収容能力に制限があり、一度にたくさんの方が受け入れられないという問題もある。

今後の展望は、御嶽山の噴火により流れ出た溶岩流や「天然記念物厳立」を含めこれらを「日本ジオパーク」に認定を目指すことと、完全凍結した滝をめぐる「冬の滝めぐり」も定着させたい。また、心と体を癒す場所として「おもてなしの心」を持って訪れたお客様に喜んでいただける活動を継続していきたいと考えている。

「陰陽師の里」づくりでまちを活性化 ―地元の宝を全国に紹介、高齢化の地域に賑わい―



佐用町役場 企画防災課復興企画室長

● 久保正彦

佐用町は、兵庫県の西端に位置し西播磨地域内にある人口約二万人の町である。播磨地域は、古くは、播磨国を形成し、周辺地域からの移住者や、渡来人が多く居住し、東上するための力を蓄える適地だったと思われる。

平成二十一年八月九日、佐用町をゲリラ豪雨が襲った。浸水深が二メートルを超える地域もあり、死者・行方不明者合わせて二十名、住家被害は二千棟以上に及んだ。絆から始まるふるさとの復興を合言葉に、町は復興の途上にある。

佐用町の星の輝きは、環境庁のお墨付き。大撫山頂に設置された西はりま天文台には、公開型で世界最大規模二メートルの口径を持つ天体望遠鏡があり、全国から天文ファンが訪れている。またレントゲンよりも明るい光を発する放射光施設Springがある。探査機「はやぶさ」が小惑星「イトカワ」から持ち帰った微粒子の分析を行った。

ここで紹介する江川地域は、佐用町の北西部に位置し、四百二十二世帯、高齢化率三九・二％（平成二十三年九月末現在）と、少子高齢化と過疎化

が進行する地域である。過疎化の波とともに農協江川支店は廃止され地域内の店もわずかで、平成二十一年には路線バスも廃止された。

江川地域では新佐用町が誕生後、旧佐用町公民館江川分館を母体に生涯学習活動と地域活性化活動を推進する江川地域づくり協議会を十一集落の住民で組織化し、地域づくりの取り組みを始めた。この地域は千年以上の歴史を持ち、古くから開けた地域であるが、構成集落のなかには高齢化率が六〇％を超える集落もあり、少子高齢化が顕著で地域の活性化を考えることが急務であった。

地域の宝さがし

ある時、江戸川乱歩賞作家の山崎洋子さんが江川地域を訪問された。何もないところだと聞いていたが、来てみると都会には失われたものが、ここには残っている。道満塚を見て「おもしろいわね！」と一言。その後、友人と共に何度も訪問された。

調べると、江川地域の道満塚・晴明塚が日本で一番立派な塚であり宝物であることが判明した。実際に他地域からたくさんの作家や芸術家が訪問し、大成された方もあり、この塚が持つ神秘的な力を感じずにいられなかった。

具体的に陰陽師の里づくりが始まったきっかけは、江川地域が国交省の募集した「新たな公」事業に応募し、採択されたことによる。これにより地域活性化に弾みがついた。

そして、現在、江川地域は陰陽師の里を標榜し、地域住民が運行する地域バス「江川ふれあい号」を毎日（土日祝日運休）運行し、特産品の焼き栗販売や月に三回ふれあい喫茶を開店、コスプレイベントの場を提供するなど、住民自らの手で新たな地域づくりが始まっている。

陰陽師塚の由来

残っている文献から見ると、次のような物語になる。

「万寿年間。関白、藤原道長は贅を尽くし法成寺を建立した。類まれな栄華を誇る一方で、人々は過酷な税に苦しみ、食べる物は麦や稗のみという時代であった。その悪政を諫めようと、左大臣、藤原道顕の依頼を受け、呪いをかけたのが菅屋道満。その時、朝廷付きの陰陽師として、道長に仕えていたのが安倍晴明。

道長が門を入ろうとすると愛犬が吠え、衣の裾をくわえ入れないようにする。晴明を呼び地面を掘り出すと、そこには黄色い紙綴りで十文字に縛られた土器が埋まっていた。晴明が、懐から紙を



清明塚コスプレイベント



道満塚コスプレイベント

これが清明が宮
延陰陽師であり道
満が民間出身の陰陽師であったため、道満の歴史を残さないようにした作為が感じとれる。江川地域で道満塚のある地域は乙大木谷、清明塚がある地域は甲大木谷であるが、甲乙つけがたし、いずれも優劣がつかぬように祀っている。



陰陽師の里ハイキング

江川地域には、この他にも陰陽道の四神（青龍、玄武、白虎、朱雀）と思われる祠が残っており、播磨の地誌「峰相記」には、次のような記述が見られる。

「清明、道満一条院御宇一隻ノ陰陽ノ

ストーリー作りが課題

（１）昔屋道満にはストーリーがない
平安時代の大陰陽師である道満には歴史的な書物が残されておらず、清明がヒーロー役に祭り上げられる一方、道満はヒーロー役になっている。これは清明が宮延陰陽師であり道満が民間出身の陰陽師であったため、道満の歴史を残さないようにした作為が感じとれる。江川地域で道満塚のある地域は乙大木谷、清明塚がある地域は甲大木谷であるが、甲乙つけがたし、いずれも優劣がつかぬように祀っている。

（２）地域の愛でストーリー作り
江川地域では、清明塚も道満塚もどちらも大切な宝物である。現代の世にまで力を及ぼす平安時代の大陰陽師である。これまで地域で大事に守ってきた陰陽師塚を全国の皆さんに紹介し交流が増えることで、高齢化が進む地域に新たな活力が湧くことを願い、サブカルチャーとして多くの若者に人気があるコスプレイベントを取り入れた。

二〇一一年三月九日と十一月十九日に陰陽師の里コスプレイベントを開催、少人数ながら地域外の若者も集まった。二回目には、地域内でもコスプレに取り組む人が登場。地域の人は交流を盛り上げるため、ふれあいイベントでもてなした。

これらのイベントで地域の意識が変わってきているように思われる。今後も地域が多くの若者の交流の場になればと思う。パワースポットを活かしたまちづくりは、始まったばかりである。全国でもここしかないパワースポットを持つ江川地域が、「陰陽師の里」として全国に認知され、町全体がにぎわうことを夢見ている。

取り出し、呪文を唱え投げると白鷺になって飛び立ち、呪いかけの道満のもとへ行った。この罪により道満は京を追われ、佐用の奥に住んで、ついに京に帰ることはなかった。

これらは宇治拾遺集や浄瑠璃などで流布されてきたものであり、真実は不明である。時は流れ、平成の時代に至った今でも江川地域には昔屋道満と安倍晴明の塚がある。清明塚が南面しているのに対し、道満塚はパワーを封印するように西方を向いて建立されている」

*

日本最古のラブストーリーの地・白兔

はくと

「十二年に一度」の賑わいから脱却目指す―



鳥取市 経済観光部 観光コンベンション推進課
観光企画係長

● 有本公博

「因幡の白うさぎ」の舞台

鳥取市の中心部から日本海の海岸沿いを走る国道9号線を車で西へ約二十分、日本最古の歴史書と言われる「古事記」にも記された神話「因幡の白うさぎ」の舞台となった白兔海岸がある。

夏は海水浴客で賑わうほか、日本海に沈む夕日が美しく、イカ釣り漁船の漁火が幻想的な空間を作り出している。

白兔海岸のすぐそばには、神話に登場する白うさぎが祀られている「白兔神社」がある。境内には、この白うさぎが皮を剥かれた体を洗ったとされる「身洗ノ池（不増不減の池）」があり、病氣や傷などの治癒に御利益があると伝えられている。

この神話「因幡の白うさぎ」には、「日本最古のラブストーリー」と言われる知る人ぞ知る続きがある。大国主命に荷物を持たせ、白うさぎに意地悪をした出雲の神々は、当時とても美しいと評

判だった「八上姫」と結婚するため、鳥取の地に来ていたのである。

大国主命に助けられた白うさぎは「八上姫と結婚するのはあなたです」と予言。先にたどり着いた神々は、ことごとく八上姫に断られ、遅れてたどり着いた大国主命に「私はあなたと結婚します」と八上姫が告げたことから、白兔神社は縁結びにも御利益があるとされている。

通年型観光地を目指して

白兔神社は、その名のとおり白うさぎが祀られているので、十二年に一度の卯年には多くの参拝者が市内はもとより県外からも訪れている。十二年前の平成十一年には正月三が日だけで約三万人もの人が押し寄せている。ちなみに、卯年以外の年の三が日はわずか四千〜五千人程度である。

また、隣接する「道の駅 神話の里白うさぎ」は、平成十八年にオープンしたものの、年間利用客はおおむね五十万人前後と横ばいで、このままでは



白うさぎが祀られている「白兔神社」

近い将来、付近に開通する「山陰自動車道」の影響は避けられない、と地元関係者は危機感を募らせていた。

そこで、必ず多くの人が訪れる「十二年に一度」の平成二十三年を白兔活性化のスタート年と位置付け、市民や観光客に「わざわざ」寄っていただく場所にするため、平成二十一年度末から様々な取り組みを断続的に行い、通年型観光地への転換を目指すこととした。

まず取り組みだのは、どちらかというと兎のイメージが強かった白兔を「愛」をテーマに変えていくこと、そして、どこの観光地でもやっていることを当たり前にやること、である。

初めに、白兔神社を縁結びの神様として前面に出すこととし、従来のお守りに加えて、新たな縁



大国主命と白うさぎの像



新たな縁結びグッズの「結び石」

結びグッズ「結び石」を売り出した。この結び石の袋には五つの白い石が入っており、良縁・子宝・繁盛・飛躍・健康の御「5」縁を表し、これを神社の鳥居に投げ上げて上手く乗ると願いが叶う——というストーリーを付けた。

また、お土産として、白うさが取り持った縁（赤い糸）を克蘭ベリーで表現し、白うさをイメージした白い生地で巻いたロールケーキ「縁ロール」、木と木をつなぎ合わせる技法「契り」をデザインした紅白の落雁「白兔のちぎり」、飛び跳ねるうさをモチーフにした「たい焼き」ならぬ「うさぎ焼き（紅・白）」などを次々に商品化した。

こうした今までになかった取り組みを背景に、観光商品の造成や営業を専門とする「観光アクションプランナー」五名を市観光協会に配置し、平成二十三年卯年初詣ツアーを中心に、全国に向けて売り出していった。また、地元美容室や若者と連携し、白兔神社での「白兔和婚」や婚活イベントを企画するなど白兔のPRに努めた。

その結果、元日に降った大雪の影響により、県内にあるほとんどの神社の初詣客が激減したにもかかわらず、白兔神社には約四万人が訪れた。

恋人の聖地

平成二十二年十二月、卯年を目前に控えた時期に、NPO地域活性化支援センター（静岡市）が主催する「恋人の聖地」に白兔海岸が認定された。これはもちろん前述の取り組みが評価された結果だと考えているが、十二年に一度から脱却するためのよいインセンティブを与えてくれた。

この「恋人の聖地」は、選ばただけでは何にもならないものであり、白兔海岸が恋人の聖地であることを全国に向けPRしていくことが何より大事なのである。

そこで、白兔をPRするためのオリジナルキャラクターを公募し、「因幡びよん兔（♂）」と「しるびよん（♀）」を選定した。この二体は、二月に実施したバレンタインイベントの中でカップル

としてお披露目した。

その後、ホワイトデーイベントとして、恋人の聖地審査委員でもある世界的ファッションデザイナー桂由美さんを招いてのトークショーを開催、七月には七夕イベント、十月には婚活&ライブイベントと、定期的に集客イベントを開催している。今後もクリスマスやバレンタインなどの「愛・恋」に関連した時期を選び、白兔海岸が恋人の聖地であることを効果的にPRしていく予定である。

今後の展望

今後、パワースポット観光地として充実していくために、①神話を含めた分かりやすい観光ガイドの養成、②恋人の聖地にふさわしい環境整備、③白兔地区でしか食べられない新たな食の開発、④鳥取砂丘など他のパワースポットをつなぐ観光ルートの整備、などに取り組んでいく必要がある。

また、白兔海岸は、平成二十二年十月に世界ジオパークネットワークへの加盟を果たした「山陰海岸ジオパーク」の西端に位置しており、観光振興だけではなく、地質遺産としての保存活動や教育への活用など地域社会発展のための取り組みも進めていかなければならない。

平成二十四年は古事記が編纂されてから千三百年を迎える年になる。秋にはJ-REXフェスティバル・シンキヤンペンが山陰で開催され、神話素材を多く持つ島根県との競合となる。こうした舞台で競いながら、白兔の魅力をさらに高める取り組みを進めていきたい。

「東御廻り」と癒しのふるさと —琉球発祥の地・南城からの発信—



南城市総務企画部 観光・振興課 主幹兼係長

大城 秀子

琉球王国時代（一四二九年～廃藩置県）より、沖縄は太陽の昇る東方を「あがり」と呼び、聖なる方角として崇めていた。沖縄本島の東側に位置する南城市は、琉球開びやく神アマミキヨや穀物起源神話の舞台となり、やがて琉球の国家統一を成し遂げた英雄・尚巴志を生み出す。

琉球が徐々に王国としての体制を整えてくると、東方の聖地は国家体制に権威を与え、霊的に保護するための国家的な儀礼が行われる地になっていった。聖地を巡拝する「東御廻り（アガリウマリー）」は、先達に敬意を表する慣習として現代に受け継がれ、琉球の歴史を幾重にも重ねた南城市の特徴である。

東御廻りの環境整備とコース設定

本市まちづくりの根幹をなす「南城市第一次総合計画」（平成二十年）や「南城市観光振興計画」（平成二十年）、「南城市都市マスタープラン」（平成二十一年）、「南城市歴史文化基本構想・保存活

用計画」などにおいて描かれているのが《東御廻り》に代表される南城市ならではの観光の在り方、意思表示である。

それぞれの計画に共通して掲げられているのが、地域資源の保存・継承・活用である。平成二十一年に南城市らしい景観の在り方を実現するため、景観行政団体として登録された。

本市の自然・歴史遺産は、そのままパワースポットとして認識されていることが多く、この素晴らしい景観資源を保全し活かしていく取り組みが一層進むことになる。

市内におけるそれぞれの地域特性に細かく配慮された設定がなされており、まちづくり全体を俯瞰した取り組みを全庁で連携しながら実現していく、という組織づくりが進められている。

また、市町村の境界を越えての取り組みとして、東御廻りの案内看板や誘

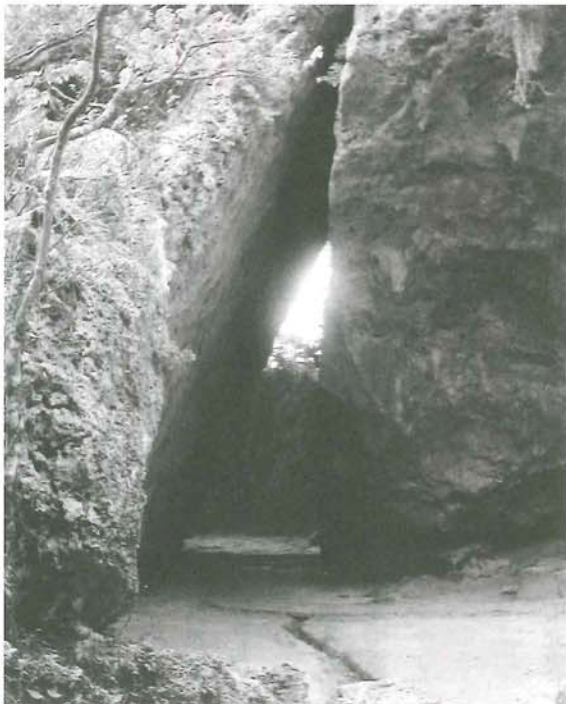
導表示等に統一したロゴマークを設置、パンフレット等の作成に複数市町村との協働を図るなどの取り組みがある。

さらに、近年のスピリチュアルブームにより、聖地を訪れる若年層の数が増加している折、その対応としてスマートフォンやタッチパネル式の案内表示整備が実施された。

癒しと健康をテーマにした取り組み

南城市では現在、恵まれた地域資源と人々のネットワークを活かした、南城市ならではの体験滞在型の観光振興と健康づくり事業に取り組んでいる。地域の特性や市の魅力を積極的に情報発信しつつ、人の流れを呼び込み、南城市の応援団を全国各地・海外に広げながら、郷土を愛する市民と協働する取り組みである。

統合医療という伝統的な医療を統合した医のか



斎場御嶽（三庫理）



尚巴志ハーフマラソン



ノルディックウォーキング（国指定文化財：仲村渠樋川）

私たちは、患部だけを見るのではなく、個人の健康や生命力全体について考えることが重視される。患者は南城市の聖地に触れることにより、癒しを体感し健康への気づきを得る。

現在、市の観光協会では「神

沖繩は全国的にも名高い移民県である。その歴史は百年を超える。二〇一一年十月に開催された「世界のウチナーンチュ大会」において、確認された世界中に広がるネットワークを活用した、移民県ならではの取り組みも模索中である。

御嶽^{うたき}や拝所がパワースポットと呼ばれることが、本来の意味が「神聖な場所」であることを考えると、活かす取り組みは尊敬することから始めたい。まるでスタンプラリーのように、パワースポット巡りをすることに對する疑問もある。

本来は祈りの場所である所で、携帯電話やデジカメで写真を撮ることに夢中になり、拝所へは見向きもしない人がいることから、パワーをもらうだけで終わるのではない、そこを訪れる方々へ正確で丁寧な情報発信をすることから始めたい。そうすることが、ひいては「護り、活かし、受け継がれる仕組み作り」につながるものと考えられる。



南城市の文化財探訪 ⑤

—東御廻りの看板ができました!—

海と緑と光あふれる私たちの南城市。その特徴を表す「東御廻り（あがりうまい）」の案内看板が、「地域再生マネージャー事業」の助成により完成しました。

南城市は沖縄本島の東側に位置し、昔から「東方（あがりかた）」と言われていました。はるかなる琉球王国時代、国王は「太陽の主」と称されるほど国民の尊敬を受けた権力者でありました。その国王自らが《アマミキヨ》が渡来して住み着いた、麦・米の発生地と伝えられる知念・玉城を参詣し、五穀豊穡・国の繁栄を祈願してまわりました。それが、時代を経ていつしか沖縄中の門中行事になっていったのです。

今回、「東御廻り」のサインを充実・強化することで、県内外から南城市を訪れる皆様のお役に立てれば幸いです。

なお、ロゴマークは斎場御嶽に深い関わりのある琉球王国最高神女「聞得大君」の祭祀具である玉飾りと、東御廻りの聖地（14ヶ所）をモチーフに海から昇る朝日をイメージしています。



広報なんじょう No.25 (2008.1.4) 8

南城市の広報に掲載された記事

のさと南城ウォーク」と銘打って、ノルディックウォークの体験が行われている。体に負担のないよう考えられたウォーキングコースは、そのまま聖地巡拝の地と重なり、身心ともに健康への効果が得られることから、市では日本ノルディックフィットネス協会公認の指導者による事業を進めている。

さらに、前述の琉球統一の英雄である尚巴志の名を冠した「尚巴志ハーフマラソン」も、年々参加者の増加を見ている人気の催しである。

「神聖な場所」を尊敬する

沖繩は全国的にも名高い移民県である。その歴史は百年を超える。二〇一一年十月に開催された「世界のウチナーンチュ大会」において、確認された世界中に広がるネットワークを活用した、移民県ならではの取り組みも模索中である。

御嶽^{うたき}や拝所がパワースポットと呼ばれることが、本来の意味が「神聖な場所」であることを考えると、活かす取り組みは尊敬することから始めたい。まるでスタンプラリーのように、パワースポット巡りをすることに對する疑問もある。

本来は祈りの場所である所で、携帯電話やデジカメで写真を撮ることに夢中になり、拝所へは見向きもしない人がいることから、パワーをもらうだけで終わるのではない、そこを訪れる方々へ正確で丁寧な情報発信をすることから始めたい。そうすることが、ひいては「護り、活かし、受け継がれる仕組み作り」につながるものと考えられる。

龍馬脱藩の道で出会いの感動を！

― 榑原流おもてなしで観光客の心つかむ ―

「坂本龍馬脱藩の郷ゆすはらであいの会」事務局

日本の夜明けを 夢見た志士を輩出した町

榑原町は高知県北西部に位置し、町面積の九一％を森林が占め、日本三大カルストのひとつ、四国カルストに抱かれた人口約三千八百人の山間の町である。町では現在、森、水、光、風などの自然エネルギーを活かした、生き物にやさしい低炭素のまちづくりを進めている。

また、掛橋和泉、那須俊平、那須信吾、吉村虎太郎、中平龍之介、前田繁馬ら六志士をはじめ、日本の夜明けを夢見て邁進した志士を輩出した町でもある。先人は、幕末期にあっても不変の志をもって坂本龍馬ら多くの志士をもてなし、この榑原町から送り出している。

このように榑原町には、豊かな自然、歴史がありそれぞれの分野で、まちづくりを進めているが、今回は訪れた人々に出会いの感動を与える「坂本龍馬脱藩の道」で繰り広げら

れている「坂本龍馬脱藩の郷ゆすはらであいの会（以下、「であいの会」）」の活動について、ご紹介したい。

「であいの会」は観光ボランティアガイドの組織として、町内有志により設立された団体で、旅行会社のツアー（六百四十人）の観光ガイドを榑原龍馬会が受け入れたのをきっかけに、以前より懸案となっていた観光ガイドによる観光事業活性化の推進を目指して、平成十九年五月一日に住民有志により組織化された。

併せて、本活動を通して町内の様々な資源・文化を活用して、都市住民との交流活動を推進することにより、榑原町の経済・文化の向上に貢献するとともに、榑原町に伝わるおもてなし文化の醸成に寄与することも目的としている。

この組織設立後は、坂本龍馬ゆかりの地や観光先進地の視察研修や現地研修等を各事業を活用して実施

し、ガイドの受け皿体制の充実に取り組んできた。その中で、NHK大河ドラマ「龍馬伝」の放送を機に、平成二十二年一月より「土佐・龍馬であい博（以下、「であい博」）」が開催されることとなり、その活動は大きく発展した。

龍馬脱藩の道 ウォーキング

龍馬脱藩の道ウォーキングは、町内中心部にある坂本龍馬等ゆかりの史跡を約一時間半から二時間かけてガイドが案内して回るウォーキングである。龍馬が脱藩前夜宿泊した那須邸跡地、榑原出身の幕末の志士を祀った六志士の墓、維新の門の群像等を巡るコースを龍馬に扮した「であいの会」のメンバーがガイドとなり案内している。

町内中心部のモデルコー

スのほかに、ご要望に応じて実際の山越えコースも案内しており、旅行会社や観光客に大変好評でリピーターも多く、榑原町の観光資源として定着している。

また、観光客からは「懐かしい風景と歴史を肌で感じることができた」「史跡めぐりでは心が洗われる気がした」「榑原に昔から伝わるおもてなしの心を感じることができた」といった感想が寄せられるほか、「今度はぜひ榑原に泊まりたい」というお手紙などもいただき、「であいの会」の活動の励みにもなってい



「龍馬脱藩の道」を観光客に案内するガイド

る。

「土佐・龍馬であい博」と 「龍馬ふるさと博」の連携

平成二十二年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」の放映が決定すると、これを千載一遇のチャンスととらえ「脱藩の道」や「維新の志士」を地域資源として活かし、地域の活性化につなげる推進母体として「ゆすはら・維新の道社中」が発足した。この組織は、町役場をはじめとする地域関係者で構成している。

町を挙げた取り組みが進む中で、「であいの会」もその一員として深くかわることとなった。町内には



町中コースを案内中



「であいの会」がおもてなしを検討



「であいの会」が皆さまをご案内します！

榑原町
に興味を
持ってい
ただけ
皆様と一
人でも多
くお会い
できる日
を楽しみ
にしてい
る。

「土佐・龍馬であい博」のサテライ

ト会場の一つ「ゆすはら・維新の道社中」が整備されることも決定し、「龍馬脱藩の道ウォーク」はその公認事業のひとつとして取り上げられ、また「土佐・龍馬であい博」の拠点として、榑原町は重要な位置を占めることとなった。

この間、「であいの会」は観光客の受け入れを行うかたわら、「ゆすはら・維新の道社中」の一員としてサテライト会場やメイン会場周辺で開催される各種イベントや行事の企画・運営に深く関わり、事業推進の実行部隊として、その役割を担って

きた。

こうした活動が実を結び、「土佐・龍馬であい博」会期中の観光ガイドの受け入れ数は約一万二千人を数え、サテライト会場「ゆすはら・維新の道社中」の入場者数約九万九千人の達成に寄与するとともに、「坂本龍馬の郷 榑原」のイメージの定着と榑原ファンづくりにも大きく貢献した。

また「脱藩の道ウォーク」は高知を代表する体験メニューのひとつとして成長を遂げるとともに、榑原町の知名度アップの大きな原動力となった。「土佐・龍馬であい博」終

了後の「龍馬ふるさと博」においても「龍馬脱藩の道ウォーク」は引き続き事業継続が図られているほか、新たなイベントの企画・運営に関わっている。

「であいの会」の会員は、榑原流のおもてなしの心を持って、訪れた方々に接し、この町の魅力を知っていただき、また行ってみたいと思っただけの活動にするために日々努力している。

私たちの活動が町の活性化につながるよう、行政や町内の各種団体と意見交換をしながら、より良いものにしていきたいと考えている。

対馬の再生へ若き女性らが熱意 ―「島おこし協力隊」を公募で招請―



長崎県町村会 常勤参与

● 渥美輝夫

かつては大陸との中継基地

国境の離島（シマ）対馬。大陸に最も近い国境の島である対馬は、古くから文化交流の中継基地としての役割も果たしてきた。

二度にわたる元寇襲来を凌ぎ、鎌倉時代中期から幕末まで、およそ六百年間にわたって対馬を統治してきた宗家対馬藩。江戸時代は海外渡航が禁じられていたが、対馬藩は釜山にある倭館を拠点に、朝鮮と外交・貿易・交流を行っていた。

ここでの産品は、対馬海峡の荒波を揺りかごに育った海の幸、四季折々の自然が育んだ彩り豊かな山の幸、島の人々が丹精込めたふるさとの味、こだわりの持つ逸品の数々。それらが対馬の生活に潤いをもたらしてきた。しかし、この離島も歴史の荒波にもまれながら、いつしか忘れ去られようとしている。

時は移り現代。これまで行政も島

民も一体となって、地域の活性化に向け努力してきた。過疎債、辺地債を活用したハード主体の手法は、人口の減少、高齢化を多少遅らすことはあっても、それらを跳ね返すことはできなかったと思う。

離島再生のキーワードは…

筆者はかつて、離島に暮らしていたころ、古参の助役と島の発展について、熱く語り合った。高度経済成長期、日本列島の至る所で、植音が鳴り響き、まさに列島改造のただ中だった時期である。

企業誘致が国内各地で競って行われ、長崎県の離島でも企業を誘致したいと力を入れていた。筆者が「企業を誘致するなら、やはり男子雇用型でなければ…」と言ったところ、その助役は、「いや女子雇用型でもいい。若い娘がいれば男は残る。男は農業でも、漁業でも食っていける。二人で働けば生活は十分やっていけ

る。娘を残す。それが離島再生のキーワードだ」と語っていたのが、今も耳に残る。

あれから二十余年。経済環境は重厚長大から軽薄短小へ、さらにはIT化へと、大きく様変わりした。日本の人口動態も、増加から

静止へと移り、さらには減少に転じたことが報じられている。企業はグローバル化し、円高傾向も顕著となり、工場立地も国内から国外へと様変わりしている。

厳しい荒波にもまれながらも、離島の生活を守るために、様々な可能性を求め、離島経営に真摯に取り組まなければならぬ。対馬市はハード事業に加えてソフト事業を…と思いを巡らせていたところ、その手法として、総務省の「地域おこし協力隊制度」があること

を知った。

それを有効活用し、地域の発展に寄与すべく「地域おこし協力隊制度」に夢を託すこととし、広く全国各地に人材を求めた。対馬市は、移住した隊員が対馬に新しい文化・技術・知識・発想・人脈・情報等をもたらす、対馬の活性化の契機になることを期待してのことだった。

5人の若者が公募にこたえる

都市部の熱意ある人材が、持てる専門性や経験を活かして、使命感を持ちながら業務に携わり、島おこし



朝鮮通信使行列

施策の強化・充実を図るため、特定の重点分野に絞り込んで公募した。その結果、有為の才を持つ五人の若者（女性四人と男性一人）を、招請することになった。

晴れた日には、遠く韓国まで見えるという上対馬で活動する、二人の女性を筆者は訪ねた。

お会いした一人は、青森県出身の方で、絶滅が危惧されているツシマヤマネコ、対州馬を始めとする自然資源の保全活動、特に「種の保存に資するための活用方法」を検討し、産業振興・雇用創出に結びつくような施策の立案・連絡調整を行う生物多様性保全担当で、大学研究機関

で研究をされていた人だった。

「ツシマヤマネコは人間と寄り添いつつも、適度な距離を保ちつつ生き抜いてきた。この儚い生命が教えてくれるのは、命の大切さと同時に生態系のバランスです」と熱く語った。そして「均衡は容易に崩れるものである以上、この命をいかに守るか、自分としても考えさせられるものが多い」と述べていた。

もう一人は、東京都出身のフリーランスの動物デザイナーだった方である。島の美しい農山漁村景観の保全・形成・活用デザインや特産品・商品開発を行う上でのデザイン・プロデュース支援、埋もれた資源の魅

力発掘と活用方法の企画立案を担う、島デザイナーだ。数ある対馬の特産品の表装を「自分のデザインでコーディネートし、売れ筋商品に育てたい」と意欲を見せていた。

前職のキャリア活かし活躍

二人は対馬の自然に憧れ、親しみを抱き、「対馬には人の優しさ、人と人のつながりがある」という。澄んだ海、天高く澄み切った空。対馬には、都会にはなくなった本当の自然がある……と目を輝かせた。

人を知る大切さ、人に優しくすることで得られる心の潤いと充足感。最近の若者には夢がない、覇気がな

いなどの声も聞くが、この二人は目標や生き甲斐を持ち、離島での暮らしにも興味があるようで、「前職のキャリアも活かし、対馬の知名度アップに向けて頑張っていきたい」と意欲を示した。

地域に根差し、楚々として生活を楽しむ現代の「防人」たち。こうした若者のために、社会インフラを整備し、生活の継続を図らなければならぬと感じる。離島の若人が一度は都会に出て、改めて離島の良さを見出し、再び離島に戻り、家庭を作り、地域を築く。色あせない生活の輝きを築いて行くこと。それが離島発展の礎なのかも知れない。これが離島再生の理念ではないのか。



対馬市「島おこし協力隊」の団結式



水産特産物のデザインについて打合せ



島おこし協力隊の業務ミーティング

そのような気持ちで、ハード・ソフト事業にかかわりなく、離島振興へ向けた財源手当、人材育成。あらゆる施策を講じなければならぬ。その基盤となる離島振興法の延長は絶対必要条件である。そのような思いを強くして、対馬を離れた。

ワークインレジデンスを活用した創造的移住の推進 ―「待ち」から「攻め」で、クリエイティブな田舎を創る―



特定非営利活動法人グリーンバレー 理事長 ● 大南信也

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。財団法人地域活性化センターでは、「移住・交流推進支援事業」として、地方が都市住民などを受け入れる移住・交流の推進により地域を活性化することを目的に、地域団体もしくは市町村が自主的・主体的に実施する移住・交流事業を支援している。

今回、平成二十二年度に同事業を活用した特定非営利活動法人グリーンバレーの取り組みを、同理事長大南信也氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルティング業務課)

事業の背景と目的

昭和三十年、五村の合併により生まれた徳島県神山町の人口は約二万一千。四市を除くと県内五番目に大きい町であった。しかし、過疎化の進行とともに、平成二十二年国勢調査では六千人余。さらに今後四半世紀で三千人程度になると推計されている。

担い手を失った農林業が寂れていく中、住民の町外流出による買い物客の減少によって、上角商店街など

神山町内の商店街にある店の灯も一つまた一つと消えていく状況である。そのため、今までは違った、新しい視点での方策が求められている。

特定非営利活動法人グリーンバレー（以下、「グリーンバレー」という。）では、神山町より、神山町移住交流支援センターの運営の委託を受け、住民目線による柔軟な移住交流の取組みを展開している。

今年十三回目を迎えた神山アーティスト・イン・レジデンス（KA

IR）では、地域住民によるコンパクトな運営が全国的な注目を浴び、アート関係者や若い人の訪問が年々増えている。KAIRに招かれた芸術家たちがポツリポツリと移り住み始めたことから「芸術家の暮らす町」として知られるようになり、今では四国の人気移住スポットのひとつとなっている。

また、将来地域が必要とする働き手や起業家を逆指名して公募する「ワークインレジデンス（WIR）」という新しい形の移住策に取組み、徐々に効果が出始めている。

一方、居住可能な空き家が不足し、百世帯を超える需要を賄いきれていないという課題が浮かび上がってきた。空き家所有者の多くは、「荷物整理は面倒だ（精神的要因）」「賃料が安いので修繕して賃貸しても資金の回収ができない（経済的要因）」

などの声があり、空き家の供給が進んでいない状況である。

これらの課題を解決するため、①荷物の撤去や清掃作業、さらにその費用を支援センターが肩代わりすることによって、所有者の精神的・経済的な負担を軽減し、空き家を提供し易い仕組みをつくること、②WIRによって、将来の商店街再生を見据え、その起爆剤となる働き手や職種を呼び込むことを目的に、地域活性化センターの「移住・交流推進支援事業」を活用し、「ワークインレジデンス」を活用した創造的移住推進事業」を行うことにした。

事業内容とその流れ

事業には、建築系大学生（東京藝術大学など延べ二百数十人）、大学院助手、町内外の職人やボランティアなど延べ五百人以上が関わり、数年間空き家となっていた上角商店街内にある長屋の西側一戸をグリーンバレーが長期賃貸、改修を進めた。

当初、改修後にテナントを募る予定だったが、改修効果を高めるため、設計、改修も含めた企画を公募した結果、株式会社トルーパーネットワークス（トム・ヴィンセント代表）による提案「ブルーベアオフィス（BO）神山」が選ばれた。

■移住・交流推進支援事業の概要

【事業概要】

地方が都市住民などを受け入れる移住・交流の推進により地域を活性化することを目的として、NPO、ボランティア団体、各種協議会、商工会議所等の地域団体もしくは市町村が自主的・主体的に実施する移住・交流事業に対し支援する。

【助成対象団体】

市町村（特別区を含む）

【助成金額・助成率】

助成金額は、1件につき200万円が上限

助成率は、助成対象経費の100%以内

【交付団体】

平成22年度 25団体

平成23年度 42団体（予定）

【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課

電話番号 03-5202-6133



長屋の改築作業の様子



改築後の長屋



サテライトオフィスで働くIT企業の社員

- ① 空き家の賃借（四月）
 - ② 実測・調査（五月）
 - ③ 入居者の決定（五月）
 - ④ 設計（五月～六月）
 - ⑤ 荷物整理・清掃（七月）
- 事業の流れは、次のとおり。

この企画は、「国内外のデザイナー、カメラマン、映像作家、建築家、ライターなどコミュニケーションを仕事にする人たちに對して、短期間、静かな環境で仕事に集中できる場を安価で提供する代わりに、滞在者は、自分の専門分野を生かした、何かしらのおみやげを神山に残していく」というものである。

ヴィンセント氏を交えた設計協議を重ねた後、改修に着手。十月初旬に工事が完了し、同月中旬、第一号クリエイターとして、映像カメラマン長岡真一氏を迎えた。

次に、上角商店街のど真ん中に、クリエイティブな外部人材が集う拠点ができたため、地域住民の間で「WIR」に対する理解が進んでおり、商店街の未来像を一緒に探っていくベースができた。さらに、工事の期

事業の成果（想定内）

- ⑥ 改修工事（八月～九月）
- ⑦ BBO神山供用開始（十月～）

事業の成果（想定外）

間中に、大学生やボランティアに對して、地域住民から差し入れがあるなど新たな地域間・世代間交流が生まれた。

予期せぬ成果も二つあった。まず、第一号クリエイターの長岡氏は、当初、一か月半程度滞在する予定だったが、数々の興味深い人との出会いの中で、神山町に移住した。トノルー社の映像部門で企業のプロモーション映像制作などを担当する傍ら、四国に残る文化や伝統などを映像に収め、ウェブサイトTopicsを通じて、国内外に向けて映像発信をしている。

二つ目は、IT企業のサテライトオフィス（SO）の誕生である。この事業のアドバイザーである東京藝

術大学の助手の方のつながりで、ITベンチャー企業の代表者が本事業に関心を示し、神山町移住交流支援センターが探し出した古民家にSOを開設した。平成二十四年二月には二社目が進出する予定である。なお徳島県ではSOを集落再生の切り札として、県を挙げた取り組みが始まっている。

急速に進む過疎化、少子化、高齢化の問題に對し、地域住民の力だけでの問題解決は困難である。グリーンバレーでは、本事業によって得られた成果を活かし、創造性豊かな、多様な価値観を持つ働き手や起業家を移住者として招き入れ、新旧住民の知恵の融合によって、常に先進的なモデルを発信できる「クリエイティブな田舎」を創っていきたいと考えている。

スポーツ拠点づくり推進事業

(神奈川県横浜市)

「横浜スタジアム」を中学球児憧れの地に

全日本少年軟式野球大会で地域に賑わい

横浜市民局スポーツ振興部スポーツ振興課

● 齋藤正守

地域活性化センターでは、「スポーツ拠点づくり推進事業」として、市区町村とスポーツ団体が連携・協力して全国各地に青少年があこがれ、目標とするスポーツごとの拠点をつくることで、スポーツの振興と地域の再生を推進する取り組みを支援している。今回は、横浜市の取り組みを同市スポーツ振興課の齋藤正守氏にご紹介いただいた。(地域支援課)

横浜市は神奈川県東部に位置し、県内で最も面積が広く、人口三百六十九万人、百五十九万世帯が暮らす政令指定都市である。

中心部から東京都心部までは、約三十キロメートルで、日本最大の国際港湾である横浜港を基盤として、首都圏の中核都市としての役割を担っている。

横浜は開国以来多くの文化、スポーツを育ててきた地であり、野球もその一つである。日本で初めて日米親善野球やプロ野球ナイターが開催され、日本野球の歴史を語る上で特筆すべき由緒ある地である。

地域スポーツクラブの普及振興と青少年の育成めざす

全日本少年軟式野球大会は、軟式野球を親しむ中学生に夢と憧れを与え、また野球を通して地域スポーツクラブの普及・振興を図るとともに、二十一世紀を担う青少年の、心身ともに健全でたくましい育成に寄与することを目的として開催され、今回で二十八回目を迎えている。

この大会は、横浜市と(財)全日本軟式野球連盟が共催で行っている中学生年齢層を対象としたクラブチームの大会で、昭和五十九年の第一回から平成二十三年の第二十八回

まで横浜スタジアムで行われている。中学校の部活チームを対象とした全国中学校軟式野球大会と並ぶ大きな大会である。

全国十二ブロック代表及び神奈川県と開催地横浜市を加えた十六チームで、四日間十五試合が行われ、準決勝、決勝が同日に行われるためにハードな大会として知られている。従来の参加チームはクラブチームが主であったが、中学校野球部チームが全日本軟式野球連盟に加盟し、クラブチームと野球部チームを合わせた大会となったことで、名実ともに日本一を決める大会となりつつある。第二十八回大会は、北海道から沖縄までの参加十六チーム、三百十一



雨のため室内練習場で行われた「開会式」



熱戦：クロスプレー

人が八月二十二日の開会式に臨み、近畿ブロック代表「竜王ジャガース」主将の東日本大震災被災地へのお見舞いと、試合ができることの感謝を述べた心のこもった選手宣誓を手始めに、四日間の幕が上がった。

レベルの高いチーム同士の試合は、夏の暑い盛りの中で熱戦を繰り広げ、会場を大いに盛り上げ、応援者たちに感動を与えた。観客は保護者を中心に地元からの応援者も多数来場し、市民の野球愛好者などを含めると、延べ二千人が熱心な応援を続けた。

決勝戦は、中国ブロック代表の「総社クラブ」と四国ブロック代表の「高知中学校」で行われ、三対四の接戦



暑さの中で懸命に応援する市内中学校吹奏楽部



優勝・準優勝チームの合同写真

で高知中学校が二回目の優勝を飾った。

大会運営や進行には多数のボランティアが参加

毎年、来場者に感動を与え続ける本大会で特筆すべき事柄は二つある。一つは、大会運営や試合進行等に数多くの地域住民がボランティアスタッフとして携わっていることである。

競技団体の神奈川県野球連盟、横浜野球連盟や横浜市立中学校体育連盟野球専門部（中学校教員）などの大人たちが役員として大会運営を、また、市内の中学校野球部を中心とした生徒たちが、開会式等の式典、場内放送、公式記録、グラウンド整

備、練習会場の運営補助などを担い、延べで四百人以上のスタッフが一体となり円滑な大会運営を行っている。このほか、試合には延べ七十人の審判員が暑い中、正確なジャッジで試合を引き締めた。関わる多くのボランティアがプレーする選手たちを支えていることで、大会が円滑かつ無事に行われている。

もう一つは、地元中学校吹奏楽部の友情応援である。神奈川、横浜以外の地域から来浜するチームは、ブルバントなどを帯同してくることに困難なため、市内中学校の応援希望校がその代わりに応援するものである。今回は、横浜市立中学校教育研究会音楽科部会が募集した八中学

校の吹奏楽部生徒、延べ千八百人が当初に担当として決められた一または二チームを継続して応援演奏し、大会を大いに盛り上げている。

この友情応援は、第一回から行われてきたものであり、される方にとっては、スタンドの応援人数が増えることで、応援全体が盛り上がり、プレーの励みになっている。

一方、する方にとっては、日ごろの練習成果を横浜スタジアムで披露することができ、また、チーム関係者と応援方法を打合せし、控え選手や保護者等と一体になって熱心に応援することで、協力、協調の意識が高まるとともに思い出深い体験を得ることができる。

大会後も参加チームと吹奏楽部が連絡を取り合うなど、交流が続いている例もあるほど、強いつながりが生じる伝統的な支援となっている。

本大会は、継続して横浜スタジアムで開催されているため、横浜市内選手や応援団など、全国各地から大勢の人が訪れて「港ヨコハマ」の認知度を高めている。地元チーム以外は全て市内のホテルや旅館に宿泊し試合に臨んでいる。また、大会会場である横浜スタジアムの周辺には、横浜みなとみらい地区、中華街、山下公園などの観光名所や娯楽施設が

多く存在し、試合後にチームや保護者等の応援者もそれらの場所を訪れていることで、地域が賑わい、経済の活性化やPRにつながっていると考えている。

より全国的に注目される大会を目指して

第二十八回を迎えた全国規模の大会であるが、観客数はここ数年間、横ばい状態である。中学校単位での参加が可能となったことで多くの選手が目標としているので、今までより全国的に注目される大会としていきたい。過去には、メジャーリーグで活躍しているイチロー選手や岡島選手なども出場したレベルの高い魅力的な大会であることを多くの人たちに知ってもらい、大会の観客数増につなげていきたい。

今後、新聞社や野球関連雑誌等に例年以上取り上げてもらえるよう働きかけ、PRの充実を図っていく必要を感じている。

高校球児の憧れの場所が「甲子園」であるように、「横浜スタジアム」で開催される本大会が、全国の中学球児の憧れの場所として第一を目指す大会となるよう、関係団体と足並みを揃えて運営や広報などの充実を図っていきたいと考えている。

「コミュニティ主体によるまちづくり」 ～日本の都市の縮図としての那覇市における実践を通して考える～



沖縄大学人文学部こども文化学科教授

宮城能彦

（財）地域活性化センターでは、地域再生の担い手となる人材の育成を目的としたワークショップ「地域再生実践塾」を実施している。本号では、今年度第四回となる沖縄県那覇市での開催内容について、沖縄大学人文学部こども文化学科教授の宮城能彦氏にご報告いただいた。（地域支援課）

1. 那覇市の地域特性

沖縄県那覇市は、日本の県庁所在地の都市の中でも様々な意味において個性的な地域である。

それは次のようにまとめることができるだろう。

①面積が約三十九平方キロメートル、人口約三十一万人と、極めて人口密度が高い。同じ三十万規模の他の都市と比べると面積は十分の一度でしかない。

②那覇市は、琉球王国の首都首里（旧首里市）と東南アジアを駆け巡っていた頃の拠点である那覇港を中

心とする旧那覇市、かつての農村地域であった旧真和志村、そして、

戦前は養豚が盛んであったが、戦争中に軍の飛行場に村のほとんどの土地が接収され、現在も那覇空港として利用されている旧小禄村の四つの地域からなっている。

③すなわち、那覇市はその狭隘な土地に、国際空港から首里城、離宮、広大な墓地やダムまでも抱えた地域である。

④さらに那覇市は自治会の加入率が極めて低く（二二・九％）、さらには自治会が結成されていない地域も多い。

⑤とはいえ、沖縄の人々の人間関係のあり方の特質としてのユイマー（相互扶助）の精神は、その根本的なところで生きている。

2. 地域再生のヒントとしての沖縄

今回の地域再生実践塾においては、まず私が以上のような那覇市の特質について説明した後、那覇市におけるコミュニティ活動支援について、まちづくり協働推進課長の上原晃氏にその理念と実践内容を紹介してもらった。

続いて、特別講師として結城登美雄先生に仙台からお越しいただき、「沖縄に残るゆいまーの大切さ」として講演いただいた。

結城先生は、かなり以前から沖縄の共同体、特に沖縄の「共同売店」に注目されていて、小売店がなくなってしまう宮城県丸森町の大張地区に沖縄の共同売店を手本とした「なんでも屋」を設立することを提案し、指導した方である。

結城先生のお話は「人が幸せに生きて生活するとはどういうことか」の追究のように私には思われる。それはその実現のためのヒントのいくつかは沖縄にある、ということである。

3. フィールドワーク

午前中は、旧真和志村にある繁多川公民館のスタッフによる地域巡りと地域活動の紹介である。

地域の案内をしてもらった後、「ゆい豆腐」という沖縄独特の豆腐作り、そして地元の野菜をふんだんに使った料理で昼食会。その講師はなはまちづくりネットワーク代表の金城喜江子氏をはじめ、総勢なんと十八名。そのほか昼食づくりに多くの地域の方々が協力してくれた大歓迎ムードたっぷりなフィールドワークとなった。

繁多川はかつての農村であった地域であり、広大な墓地をかかえ家屋が密集して来ているにもかかわらず



結城先生による講義の様様



フィールドワーク① 繁多川公民館



フィールドワーク② 若狭公民館



昼食（繁多川公民館）：沖縄の伝統料理

＜平成23年度第4回 地域再生実践塾の概要＞

＜日 程＞

第1日 平成23年10月26日（水）

Lecture 1 「総論・問題提起」

主任講師：宮城 能彦 氏

Lecture 2 「那覇市におけるコミュニティ活動の支援について」

特別講師：那覇市まちづくり協働推進課
課長 上原 晃 氏

Lecture 3 「沖縄に残る“ゆいまー”の大切さ」

特別講師：民俗研究家
結城 登美雄 氏

第2日 平成23年10月27日（木）

フィールドワーク1 「繁多川公民館」

地域住民による史跡ガイド・伝統料理

フィールドワーク2 「若狭公民館」

地域住民が参加しやすい環境づくり

第3日 平成23年10月28日（金）

グループワーク — 視察結果のとりまとめ、グループ発表・講評

Lecture 4 総括

主任講師：宮城 能彦 氏

基本的に農村的紐帯の良さが残り、人々の温かみを感じることができるといえる。受講生はそのホスピタリティの高さに前日の結城先生の講義内容を実感したことだと思ふ。

午後は、旧那覇市地域である若狭地域において、若狭公民館のNPO法人地域サポートわかさ理事の宮城潤氏による地域の案内と公民館活動についてのレクチャーであった。

4. 意義と課題

若狭地域は、戦前の夜の繁華街。現在でも飲食店や風俗関係の店が多く地域活動を行うにはかなり難しい部類に入る地区であろう。さらに最近では大型客船が接岸できるバースの完成やそれに伴う道路の拡張が行われて地域が分断され、お年寄りが近所を歩くのが難しくなってきたという新たな問題も抱えている。そういった状況下でNPOを中心とするメンバーが地域活性化のために奮闘する姿を見ることができた。

戦後すべてを失った那覇市民は、住民が団結して全くゼロの状態から生活を築き上げていくしかなかった。その結びつきが今でも強力である。

することは繁多川の事例から理解できたとする。戦後しばらくすると地方からたくさんの方が那覇市に移住してくる。その人たちは「郷友会」という同郷の相互扶助組織をつくり強い絆で結ばれていた。

すなわち、那覇市の自治会加入率が低いのは、元々の那覇市住民の結束が強く、かつ、移住者も郷友会が自治会以上の役割を果たすために自治会に加入する必要がなかったという戦後のスタートが基盤になっていたものである。

もともと相互扶助の強い地域に、五年前によりよく公民館ができることによって地域の活動がより活発にかつ開放的に展開できたのが繁多川の事例であり、かつての地域の結びつきを再生しようと試行錯誤しているのが若狭地区である。

今回の地域再生実践塾においては、コミュニティのもつ潜在的な力をどのように具体化し体系化して可能性を広げていくかという実践例を学び、かつその重要性を再認識できたのではないかとする。今回は主にNPOによる実践であった。今後は、行政がどのように具体的にかかわればよいのかを実践を積み重ねていくことによって見出ししていく、その成果に期待したい。

地域活性化フォーラムin岩手・・・・・・・・・・・・・・・・

復興へ向け地域の連携を呼び掛け

震災後の地域コミュニティ再生テーマに議論

財団法人地域活性化センターは、地域活性化の今日的なテーマを取り上げたフォーラムを毎年開催している。現在、東日本大震災の被災地において復旧・復興の取組みが進む中、地域づくりにおいて要となる地域の絆やコミュニティの再生・活性化が求められていることから、今年度は

十月二十八日に岩手県花巻市で「大震災からの地域再生」ふるさととは負けない」をテーマに、岩手県との共催により開催した。

会場であるホテル紅葉館・巖鷲の間には、地方公共団体の職員をはじめ、地域づくり団体や一般の方々等、県内外から二百名を超す参加者が集まり、学識経験者らの意見・提言を熱心に聴いた。

地域のつながりを重視して復興に取り組む

フォーラムでは、当センターの石田直裕理事長による開会挨拶の後、共催の岩手県副知事の宮館壽喜氏からご挨拶をいただいた。

宮館副知事は「岩手には元来、結いに見られるような、地域の中で助け合い、協力し合う結びつきが受け継がれている。復興計画においては、地域のコミュニティや人と人、地域と地域のつながりを重視しながら取り組みを進めている」と述べられた。

また、開催地である花巻市でいち早い被災者の受け入れなど積極的な支援が行われてきたことにも触れ、「内陸と沿岸を結ぶ支援を通じて、地域と地域のつながりが一層強まり、県民一丸となって復興に取り組む機運が大きく盛り上がっている。このフォーラム開催を契機に住民の手による地域再生の取組みが一層推進され、地域間の結びつきがさらに

深まることに期待している」と語られた。

《松尾雄治氏 基調講演》

「がっちり、スクラムを組もう！」

「日本一の復興を実現しよう」

続いて、ラグビー評論家の松尾雄治氏による「がっちり、スクラムを組もう！」日本一の復興を実現しよう」と題した基調講演が行われた。松尾氏は、慣れないポジションへの変更や怪我といった苦しい状況のときでも、「ポジションはチームのためにある。チームのために自分が何をできるかを考えてみてはどうか」という父親の言葉を受けて、あきらめずに努力を重ね、チームがラグビー日本一となった自身の経験を語った。

そのうえで「私の人生もやってみたいとわからないことの連続だった。（被災地は）やってみないとわ



基調講演する松尾雄治氏

からないことにこれから挑戦していかなければならない」と述べ、手（沿岸部）をけがしているような今の岩手県が、けがが治ったときにより一層強い身体になれるよう、岩手県という「チーム」のために、内陸部、沿岸部それぞれの「ポジション」でできることから一つずつ取り組んでいこう、と復興に向けた取組みをラグビーにたとえて呼びかけた。

《パネルディスカッション》 被災地のコミュニティの 維持・再生について議論

続くパネルディスカッションでは、コーディネーターをNPO法人神戸まちづくり研究所理事・事務局長の野崎隆一氏が務め、パネリストとして、釜石市長の野田武則氏、岩手大学農学部教授の広田純一氏、IBC岩手放送アナウンサーの大塚富夫氏、そして釜石市にある旅館「宝来館」女将の岩崎昭子氏の四名が登場し、大震災後の被災地におけるコミュニティの再生について議論を繰り広げた。

まず冒頭に、野崎氏が「阪神淡路は都市型災害で、地域コミュニティの希薄な都市部における復興の大変さを味わった。中越では山間地の小



野崎

コーディネーターの野崎隆一氏



パネルディスカッションの様子

さな集落が主な被災地だったことで、都市と田舎の集落のつながりが注目された。そして今回の東日本大震災では、人口減少が都市部に比べて急激に起こっている地方において広範囲にわたり津波が襲った。どれだけの人が地域に残るのかといった課題にどう対処していくか問われている」と、これまでの震災の特徴を比較した。

大塚氏は、マスコミの立場から「視聴者のみなさんは声をもっと上げてほしい。テレビやラジオでその声を伝えることで、様々な想いが広がり、具体的な政策の後押しになったり、被災地に元気を送ることもできる」と語った。

岩崎氏は「七カ月たった今、被災地にいる自分たちが抱えている心の

空洞感は、自分たちで動かなければ埋まらないと感じている。内陸部の方々もぜひ沿岸部へ来てほしい。岩手県全体として頑張ろうという気持ちがあれば頑張れる」と復興へ向けた地域間の連携について語り、また「今の仮設住宅のコミュニティを大事にしながら、戻るべきコミュニティのつながりへとうまく移行する仕組みを一緒に考えてほしい」と呼びかけた。

野田氏は、釜石市に対する多くの方々からの支援に対する感謝の意を述べた後、「被災された方が自立し、まちづくりに参加できるようになることが大切。そのために、復興過程における各ステージで必要とされる支援をするのが行政の役割であり、被災者に寄り添いながら取組みを進めたい」と述べた。そして、地元ではできないこともあり、今後も引き続き温かい支援をお願いしたいと呼びかけた。

広田氏は、復興するまでのコミュニティの維持について、仮設住宅の入居者と集落に残った方との間に温度差が生まれていることに触れ、「被災の程度の違いが気まずさ・疑心暗鬼を生み、付き合いを難しくしている。会わないことがそれを助長する。避難中のコミュニケーションが大事

であり、会う機会を増やしていく必要がある」と述べた。

また、雇用の確保という課題については、商工業、漁業等の復興が最も重要であるとした上で、「観光」という言葉には抵抗があるが、被災前の地域の素晴らしさと復興への想いを伝える研修ツアーを受け入れてはどうか。被災地が少しでも元気になる、被災地から学びたいという地域のニーズにも応えられる」と提案した。

**全国からの支援者を受け入れ、
みんなで考えよう**

最後に、野崎氏が「自然災害では本来ゆっくり訪れる（過疎化、高齢化などの）課題が一挙に十年くらい早く来てしまうものであり、明日の日本全体の課題に対して被災地の方々が先駆的に取り組んでいるとも言える。その取組みの中に日本全国に対するヒントが含まれている。自分たちだけで復興しなくてはならず、全国から支援に来る人たちを受け入れ、地域コミュニティの再生についてもみんなで一緒に考えていきましょう」と語り、二時間に及ぶディスカッションを締めくくった。

地域づくり情報課 ● 杉森蓉子

「アート」で淡路島の魅力伝える

「アート」による新たな価値と交流の創出をめざす

淡路島は、兵庫県南部の瀬戸内海に浮かぶ南北五十五^{キロメートル}、東西二十二^{キロメートル}、面積五百九十二・二六平方

キロメートルの瀬戸内海最大の島であり、本州と四国を結ぶ神戸淡路鳴門自動車道が縦断する交通の要衝として重要な地位を占めている。兵庫県に属し、北から淡路市・洲本市・南あわじ市の三市からなり、約十五万人が生活している。

明石海峡や鳴門海峡などの美しい景観や、論鶴羽山・柏原山・先山の

「淡路三山」など瀬戸内海国立公園に指定される豊かな自然環境が維持されている。

今回、アートを通じ、淡路島の自然や歴史文化を見直し、個人の世界観を広げ、心豊かな生活を送ることを目指した活動を展開する淡路島アートセンターを訪ね、理事長を務める中田亜祐美氏と理事の山口久仁子氏に活動状況をうかがった。

アートセンターのはじまり

平成十六年、大型台風の直撃により、何年も空き家となっていた木造家屋が損壊したことを知った島内の主婦、学生、建築家や芸術家など様々な職種の人が集まり、淡路島アートセンターを発足させ、空き家のリノベーションに取り組んだ。メンバーの様々なアイデアが詰め込まれた結果、リノベーションが行われた空き家は、アート作品の制作や展示が可

能なコミュニティの新たな拠点「日の出亭」として再生された。

翌年、このリノベーションに関

わったメンバーが中心となり、継続的に淡路島でアートプロジェクトの企画運営に取り組むためNPO法人を立ち上げた。年齢や職業がバラエティーに富んでいる現在のメンバー三十一名のうち三分の一は島外に住んでおり、外からの目と情報を持ちこみ、柔軟で幅の広い活動を行っている。

日常に埋もれている可能性を掘り起こす

前述の「日の出亭」は、リノベーションが行われた翌年から平成二十二年までの六年間、アサヒビール協賛の淡路島アートフェスティバルの会場として使用された。そこを拠点にアート作品の展示など

様々なイベントを展開し、住民がアートに触れるきっかけと、島外との交流の輪を広げる機会を提供してきた。

見慣れた日常を魅力的に変えていきたいという思いから精力的に活動が続け、使われなくなった紡績工場のレンガ倉庫において開催したキャンドルイベントでは、キャンドルの幻想的な明かりの中でコンサートを行い、百名を超える人を集め、心豊かな交流を創出した。

平成二十一年、ヨーロッパを中心に活躍している映像作家のヴェルナー・ペンツェル氏とその妻で写真



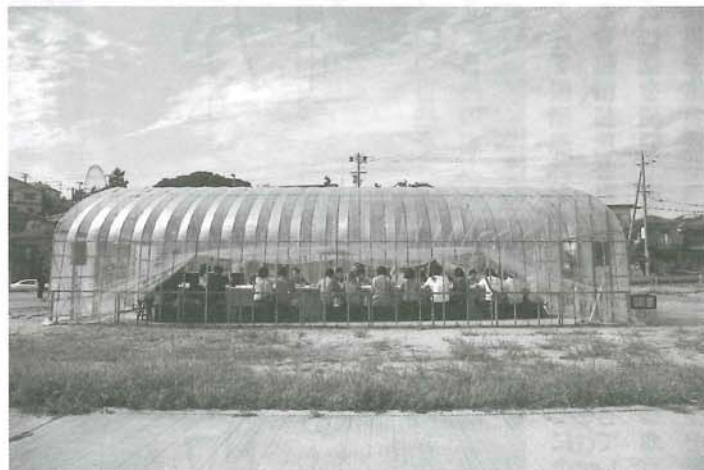
リノベーションによって再生された「日の出亭」

★ 団体プロフィール ★

設立年月＝平成17年12月
設立・運営主体＝NPO法人淡路島アートセンター
代表者＝中田 亜祐美
会員＝31人
〈連絡先〉
〒656-0025
兵庫県洲本市本町8-4-11



廃校を利用したカフェ「ノマド村」



海が見えるビニールハウスのレストラン

また、アートによるまちづくりを持続させていくためには、活動の担い手の育成とアートを媒介に人々が関われる機会を提供し、地域にアートが溶け込む土壌が作られることが必要である。

そこでアートセンターでは、アート作品の制作や発表の場を求めるアーティストに活動の場を提供し、移住を促す取り組みを進めるとともに、子供たちがアートに触れる機会

家・映像作家の茂木綾子氏が家族で淡路島に移住してきた。アートセンターは行政と彼らのパイプ役となり、廃校となった小学校を市から借り受けリノベーションし、彼らの活動拠点となる「ノマド村」をサポートした。彼らの生き方、生活スタイルなどがメディアでも注目され、雑誌などにもたびたび取り上げられている。土日には「ノマド村」でカフェが開かれ、地元や島外からの来客で賑わいを見せている。

また、地元食材を使った料理を提供する一日限りのレストランのプロ

デュースも行った。ユニークなのは、海の見える場所にビニールハウスを設置してレストランとしたところにある。これは、島内いたるところに農業用のビニールハウスが目につくところから発想したものであるが、島外から多くの人が訪れ、島内の人がなかなか利用できないほどの盛況ぶりであった。

これらの取り組みは、淡路島という限られた空間に新しい価値を創出し、島の交流人口の増加という効果だけでなく、周りにある何気ない場所やモノ、食を住民が見直し、地域

に誇りを持つきっかけになっている。地域の魅力を持続的に伝えていくために

今後の課題は、持続的な活動が可能となるような仕組みの構築である。現在、アートセンターの活動の多くは、市や県からの補助事業や委託事業となっている。限られた予算の中で、メンバーの努力や近隣にある大学の協力を得ながら活動しているが、幅広い活動を持続していくために、もっと自立した団体にしていかなければいけないという。

を作るため、親子を対象としたワークショップも行っている。特に演劇を用いたワークショップは子供の反応が良く、様々な役割と考えるきっかけを与えることで、コミュニケーション能力が高まるとともに、子供の新たな可能性を引き出している。今後、その土地にあった手法と表現を探しながら、アートを誰にでもわかりやすく伝え、地域にとって必要となるものや刺激になるものを提供し続けたいという。

誇れる地域を目指して

今回の取材で、「淡路島は豊かな自然に恵まれているが、若者が生活するには何か物足りない」そんな言葉を聞いた。簡単に新しいものを作ることはできないが、今あるモノを楽しく変えていくことはできる、そんな思いがアイデアと行動力を生み出していると感じた。

地域を楽しみ、面白いことをやってみたい人たちが集まり、楽しんで参加した結果が地域に新たな価値を創出し、地域に活力を生み出している。この「活力」が継続的に地域に波及し、世代を超えて誇れる地域づくりにつながっていくことを期待したい。

自然の恵みを生かす里山の取り組み フロンティア精神で自然を守る地域づくり

湖西市は、静岡県の最西端、愛知県との境に位置する人口約六万二千人の市である。本州の中央に位置する恵まれた地域で、古くから交通の要所として栄えており、全国で唯一現存する関所建物として新居関所がある。

また、緑豊かな湖西連峰、はるか水平線を臨む太平洋、東に美しい水をたたえる汽水湖の浜名湖がある温暖で自然豊かな地域である。

今回、この自然豊かな湖西市で「豊

かなふるさと」の自然をみんなで守る

地域づくり（自然の恵みを生かす里山の取り組み）を掲げている『湖西フロンティア倶楽部』を訪ね、会長を務める寺脇精二氏と事務局長の片山愛司氏に話を伺い、取材日に開催された「親子体験教室」の様子を拝見した。

設立経緯

湖西フロンティア倶楽部は、青年団OBが中心となり平成四年に設立された。かつて地域住民のコミュニケーションと地域の活性化に力を発揮してきた地域青年団の衰退を危惧して結成されたものであり、構成メンバーは、会社員、自営業、公務員など様々である。

発足から現在までの十九年間、地域の自然環境や史跡の保護、青少年リーダーの育成など、各種団体と連携し、住み良い地域づくりに取り組

んできた。

豊かな自然の残る地域であるが、近年、宅地化や企業による工場建設などによって、里山や農地が減少してきている。

また、地域の農業離れも進み、休耕地が増加することによって荒れ地が目立つようにもなった。この状況に危機感を持った湖西フロンティア倶楽部は、豊かな自然を広く住民に知ってもらいながら、住民の手で豊かな自然を守っていくと活動を進めてきた。

多岐に渡るイベント活動

平成九年に、市内中心部から少し離れた自然溢れる会場で、フロンティアスクールというキャンプを通して自然体験をするイベントを始めた。市内の小学生を対象に開催し、地域の中高校生がリーダーとして小学生をサポートした。当初は、キャ

ンプに不向きな場所であったため、水やトイレなどを整えて開催した。この取組により、後にこの場所が「おちばの里親水公園」として整備されることになった。

その後、親子が互いに向き合う機会を増やそうという会員の提案から、フロンティアスクールを保護者も巻き込む形で発展させ、親子体験教室を開催した。保護者には、運営に積極的に参加してもらい、子供は、その姿を見て、親のたくましさを感じていくようである。

当初は、参加家族が少なかったが、口コミなどで次第に参加者が増えた。参加費を低く設定するなど、参加しやすい環境を工夫しながら継続している。

訪問した日の親子体験教室では、



おちばの里親水公園

★ 団体プロフィール ★

設立年=平成4年4月

設立・運営主体=自主的組織

代表者(会長)=寺脇 精二

会員=26名

〈連絡先〉

〒431-0403

静岡県湖西市大知波772-3

電話: 090-1291-3210

参考HP: <http://www.kosai.org/>

org/



親子体験教室の様子



親子体験教室の作品



手作りの機械を公園に設置

秋空のもと、落ち葉や木の実を使った思い思いの作品を制作し、参加者が各自、お気に入りの作品に投票する形で作品展が行われた。参加者は身近な自然に触れ、焼き芋や郷土料理のご飯、大きな釜で作ったきのこ汁を食べ、秋を全身で感じているようであった。

そのほかこの時期には、おちばの里とうげ祭りという、地域の文化財と自然に親しむハイキングを実施しており、市内外から約三百人の参加者がある。市内の小学校から平安時代に山寺として存在した国指定文化財である「大知波峠廃寺跡」まで往復約十^{キロメートル}の道のりを歩き、地域の文化財を身近に感じる機会となっている。

標高約三百四十^{メートル}の廃寺跡から

は、浜名湖が一望でき、さらに太平洋まで望む眺めは雄大で、参加者は景色に癒されながら、自分のペースで楽しんでいる。険しい道もあるが、誰でも参加しやすい環境を整えており、目の不自由な方も盲導犬と一緒に参加し、みんなでサポートすることで、ノーマライゼーションの意識の向上にもつながっている。

また、廃寺跡では学芸員による説明、大声コンテストや絵手紙コンテスト、あさり汁の振る舞いなど様々な催しも行われ、リピーターも多い。

自然と親しみながら人材育成へ

次代を担う子どもたちに自然を守る意識を高めてもらおうと今川こども自然クラブを発足させ、活動を続けていく。小学生から高校生が月に

一度集まり、北部の今川に生息するゲンジボタルやヘイケボタルを保護するため、水質調査、生物観察など自然環境を守る取り組みをしている。この活動が認められ、平成二十二年度に環境大臣賞を受賞した。

そのほか、設立当初から取り組んでいる浜名湖クリーン作戦や、地域の住民と協力しながら、今川に生息する絶滅が危惧されている生き物の保護など、様々な活動を通して地域の自然保護に対する意識の向上を図っている。

また、静岡県青少年指導者養成事業に取り組み、自然と親しみながら地域を活性化するリーダーを養成している。

今後の取り組み

十九年にわたり、自然を守り里山を生かす取り組みを続けてきた。その成果として、湖西市によって「おちばの里親水公園」が整備され、周辺の環境整備にもつながった。

公園には、整備した際に伐採した木材をベンチなどに加工して設置し、春には地域から集めた鯉のぼりを泳がせたり、梅園や山桜を観賞したり、秋には紅葉を楽しむイベントを開催している。

現在では、この施設を活用するために、地域と関係団体、行政が丸となって取り組んでいる。今後は、周辺の自然林を生かして里山づくりを拡大し、この地域一帯を自然保護保全地域として、より一層市民が憩える場となるように整備を進めていこうと考えている。

会員が二十六名と小規模な団体であるが、楽しむことを大切に、様々な団体と連携をしながら、一人ひとりの個性や特技を生かして活動している。また、参加者が運営に積極的に協力してくれることが、大きな力となっている。

自然を身近に感じ、環境保全を無理なく続ける活動の今後が楽しみである。

「中房総」を世界に通じる観光地に！

10市町が手を組み「観光空白地」返上作戦

中房総観光推進ネットワーク協議会 会長・市原市長 ● 佐久間隆義

房総半島の中央部、中房総の観光振興を国や県の支援を受けながら、関連自治体で進めようという「中房総」構想が動き始めています。

お向かいの静岡県・伊豆半島には「中伊豆」という全国的に知られた観光エリアがあるのに、わが房総半島の中央部は観光資源が眠ったままの「観光空白地」で知名度もいまいつ、という反省があるからです。

このためこの構想は「中房総」の名前を国内外に発信し、「中伊豆」のような有名な観光地に育て上げようというのが狙いです。

もともと、中房総地区には圏央道（首都圏中央連絡自動車道）の部分開通に対応した中房総の観光振興を進める「中房総観光推進ネットワーク協議会」がありました。これは市原市、鴨川市、いすみ市、茂原市、

勝浦市、長柄町、長南町、大多喜町、御宿町の九市町で構成され、協議会メンバーも観光担当の部課長クラスで構成していました。

その後、南房観光で実績のある鴨川市が抜け、八市町になっていました。様々な取組みをしてまいりましたが、知名度は思うように上がりませんでした。それは、交通が不便というハンデがあったからです。

圏央道の全面開通に対応

今回の中房総宣言は、二〇一二年度中と予想される圏央道の全面開通に対応するものです。鴨川市が抜けた代わりに一宮町と睦沢町が加わり、十市町になりました。いずれも、圏央道の開通によりインターチェンジができ、首都圏から四十一・五十キロと、格段に便利になります。

現在の中房総の交通手段はJRの内房線、外房線のほか私鉄の小湊鉄道、いすみ鉄道などが主流ですが、圏央道の全面開通で高速バスやクルマが加わり、はるかに便利になります。これを機に、協議会のメンバーを部課長クラスから自治体トップの首長に格上げしました。

暑い盛りの昨年八月、市原市に溝畑宏観光庁長官や県の佐藤忠信観光担当部長をお招きし、発足総会を開きました。

総会には都合により、茂原市、長柄町、睦沢町の首長は欠席でしたが、私のほか、いすみ市の太田洋市長、

勝浦市の猿田寿男市長、御宿町の石田義廣町長、大多喜町の飯島勝美町長、長南町の藤見昌弘町長、一宮町の玉川孫一郎町長、といった、この地域の自治体では強い影響力を持つメンバーが「中房総を大いに売り込もう」と氣勢を上げました。

皆さん、観光による地域振興に強い意向を持っていらっしゃる方々ばかりで、自分の市や町の発展や開発を熱心に探っていることがうかがえました。

互選でネットワーク協議会の会長に私が選ばれ、副会長に太田・いすみ市長と藤見・長南町長、監事に飯

中房総観光推進ネットワーク協議会



中房総地図

島・大多喜町長、石田・御宿町長が選ばれました。

3力条の「中房総宣言」を採択

会では、三力条からなる次のような「中房総宣言」を採択しました。

中房総宣言

一、私たちは、互いに連携し、切磋琢磨することで、地域振興を図り、中房総の名を全国に発信します。

一、私たちは、圏央道の供用開始による波及効果を最大限に活かし、多くの人を中房総に呼び込む取り組みを推進します。

一、私たちは、中房総を訪れてくれる人を、笑顔とおもてなしの心を持って迎えします。

平成二十三年八月四日

また、溝畑観光庁長官が来賓として基調講演され、「観光振興は国際競争の時代に入っている。世界の中房総を目指すべきだ。世界の観光事情を十分に視察し、中房総が世界でも勝てる様な新たな切り口を練って欲しい」と挨拶されました。

県の佐藤観光担当部長は「中房総にはまだまだ埋もれた観光資源が豊富にあるはず。圏央道の全面開通でさらに観光資源の裾野は広がること

が予想される。各自治体と協議会が観光資源の発掘に共同であったり、観光県・千葉の発展に寄与して欲しい」と期待を表明されました。

各市町が知恵を絞り対応

この中房総宣言以来、各市町が可能なところから手を打ち始めています。市原市では十月二十九・三十日の二日間、「第一回上総いちほら国府祭り」を立ち上げました。上総の国の国府が市原にあったことを地域振興に利用し、市原から「元氣」の「絆」をつなこうと私も国司（長官）に扮し祭りを盛り上げました。

会場のJ R五井駅前東地区には初回にもかかわらず延べ八万人が集ま

りました。今後、有力な関東地方の祭りとして育て上げます。

このほか、長柄町では溝畑長官のアドバイスもあって、医療ツーリズムが進んでいます。町内にある塩田病院附属・福島孝徳記念病院を日本でも有数な脳神経外科の医療センターに育て上げようというものです。

この病院の医師、福島孝徳氏は日米を往復する世界最高クラスの腕を持つ脳神経外科医といわれます。脳神経の手術にとって死活問題と言われる時間が圏央道の開通により成田国際空港や東京、横浜などの首都圏からも短時間でくることが可能になるのです。

また「ゴルフ銀座」と呼ばれる中房総はゴルフツアーなども期待できます。それに米や野菜づくりを体験させる農業体験ツアー、新鮮な魚介類や野菜、果物狩りなどのバスツアーなども格安で広まっています。

地場産品を安く売る「道の駅」も各地に次々とできています。太平洋に面した一宮町ではサーフィンの全国大会を開こうと知恵を絞っているところでは。

中房総の観光振興はこれからです。皆さまが中房総の観光を楽しんでいただけますよう頑張りますのでよろしくお願いします。



「中房総宣言」を採択し氣勢を上げる首長たち



中房総観光推進ネットワーク協議会の首長会議



中房総地域の名産品・特産品の展示

来て、見て、**ふるさと** 発見祭!!

JOIN 移住・交流イベントを東京で開催

移住・交流推進機構（JOIN、会長 島田晴雄・千葉商科大学学長）は、都市と地方が共生し、国民一人

ひとりが健康で心の豊かさを実感できる社会の実現を目指し、企業や自治体による移住・交流希望者への情報発信、移住・交流のニーズに応じたサービスの提供を支援する、全国的な推進組織として、様々な活動を実施している。

今回、JOINとしては平成十九年十月の設立以来、初の単独主催となる「JOIN 移住・交流イベント2011」来て、見て、ふるさと 発見祭!!」を十一月二十三日（祝日）、東京・浅草の都立産業貿易センター台東館で開催した。

会場には首都圏を中心に、田舎暮らしや地方との交流体験などに関心を持つ三十〜五十代の人々を中心に約千五百人が訪れた。来場

者の男女比ではほぼ一対二で、女性の割合が高かった。

地方の魅力伝える
多彩なプログラム

このイベントは、都市から地方への移住、あるいは地方との交流体験

や田舎暮らしなどに興味を持つ方々に、地方の魅力を楽しく伝え、体験していただくことにより、移住・交流への一歩を踏み出していただくのが目的である。

出展したのは、JOIN自治体会員五十一団体（道府県三十二、市町村十九）、法人会員十一団体、協賛企業一団体の計六十三団体。

イベントでは、自治体会員による移住相談・ご当地情報のPRや移住セミナー、法人会員による移住・交流に関する商品のPRに加え、「ひこにゃん」などご当地キャラクターとの撮影会、新鮮野菜のマルシェや地酒PRなど、楽しみながら「ふるさと」を感じられるよう、多彩なプログラム内容となった。



11月23日はいいふるさと探しの日



各地のゆるキャラが大集合!!



地酒で地方の“食文化”にふれる

来場者の八割以上が「田舎暮らし」に興味示す

開催会場で当日行った来場者へのアンケートによると、来場目的は、女性の八割近くが「ステージやマルシェ等の交流体験」などと回答。男性は五割以上が「移住情報の収集」と答えた。男女間で若干の温度差があったものの、移住を本格的に計画している人も見られ、今回のイベントを通して「田舎暮らしに興味を持った」と回答した方は、男女ともに八割以上



各自治体ブースでは方言が飛び交う大相談会



移住セミナーは自治体も来場者も真剣そのもの



ステージでのお笑いライブで会場は大盛り上がり

にのぼった。具体的には――、

▽「子育ての環境を考えて、真剣に移住を考えたい」という若いファミリーのほか、▽「定年後の移住に向けて、まずは色々な地方を訪れてみたい」（四〇代のご夫婦）、▽「年をとったら移住もいいかもと思うが、まずは交流から」（三〇代男女）――など、それぞれに「ふるさと」への想いが感じられた。

移住というと、仕事や住まいなど田舎暮らしへの不安などから敷居が高いと思われるが、地方の受け入れ体制は着実に整備されてきている。今回のイベントのように、地方か

らよりリアルな情報発信がされることで、都市住民が地方に目を向けて一歩踏み出すきっかけをつくることのできるはずである。

改めて「交流」から「移住」へ、段階を経て都市住民のニーズを地方へつなげていくことの重要性が浮き彫りになった。

さらに魅力的な移住・交流イベントに

JOINのイベントは「移住・交流」がテーマ。移住希望者はもちろん、特に潜在的に田舎暮らしに関心を持つ人々の集客にも力を入れた。結果として、自治体会員は体験プ

ログラムやお試しステイなどの交流の側面から、幅広い年代層の方に地方をPRすることができた。

また、法人会員も、食・交通・エンターテインメントなど、各企業のさまざまなソリューションで来場者に地方の魅力を伝えるとともに、「参加会員同士との情報交換の場にもなった」と好評だった。

自治体・法人会員とも本イベントの継続開催希望が圧倒的に多く、JOIN事務局としても今回の開催に十分な手ごたえを感じている。

JOINでは、今回のイベント結果の検証を踏まえ、平成二十四年度もさらに魅力的な移住・交流イベントが開催できるよ

う、引き続き自治体会員と法人会員の連携支援を強化し、全国的な移住・交流の拡大に取り組んでいきたい。

JOIN事務局

深江久美子
移住・交流推進機
構 (JOIN)

<http://www.jiu-join.jp/>



米原市長 ● 泉 峰一

絆で築く元気な米原市づくり

明けましておめでとうございます。皆様には、平成二十四年の新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は日本にとって大きな危機に見舞われた年でした。三月に発生した東日本大震災は、大津波や福島の子力発電所事故をもたらし、日本全体が深い悲しみと不安に包まれました。しかし、一方では、国内はもとより世界中から被災地への支援の輪が広がり、あらためて絆の大切さや人の温もりに気づかされた一年でもありました。

今年こそ、みんなが笑顔になれる一年になることを願うところです。

米原市は、誕生から八年目を迎えた滋賀県で一番小さな市です。近畿、東海、北陸の真ん中に位置し、古来から東西文化が交流し、豊かな歴史と自然に恵まれたまちとして誕生いたしました。

日本百名山の一つ「伊吹山」や日本一大きい湖「琵琶湖」をはじめとする雄大な自然を背景に、滋賀県で唯一の新幹線駅や高速道路ジャンクションを有する交通結節点のまちとしても有名です。

この交通の利便性を活かし、鉄道や高速道路からのアクセスが良好な「米原南工業団地」への企業誘致や米原駅東部土地区画整理事業など、滋賀県東北部の玄関口、ま

いばらの顔にふさわしい都市づくりを推進しています。私は市長に就任して以来、「絆」が地域防災をはじめ、子育てや過疎高齢化対策、地域福祉などあらゆる行政課題の解決につながるものと考え、「絆」をキーワードとした市政運営に努めてまいりました。本年もさらなる「絆」づくりの推進を図るとともに、「防災」に重点を置いた施策に取り組んでいきたいと考えております。

一部の地域が隣接する福井県の原子力発電所から五十[＊]圈内に入る本市では、現在、原子力災害を含めた地域防災計画の見直しを進めているほか、自主防災組織の強化とあわせて地域の避難所などを示した「絆マップ」の作成や、もしもの時に高齢者や障がい者の方々の不安を解消する「絆バトン」の配布など、災害時こそ、「絆」による地域力が発揮できる災害に強いまちづくりを進めています。

さらに、「絆」による持続可能なまちづくりを目指そうと、最も基本的な人間関係である親子の絆を見つめ直すきっかけづくりとして「まいばら親子の絆プロジェクト」に取り組み、親子に関連した様々な「絆」事業を展開しています。

その一つとして、米原駅東西自由通路Oyakoggyラリーにおいて「水源の里まいばら OYAKO（おやこ）写真展」と「親子携帯写真展」を開催し、さまざまな親子の姿を展示しています。これらの写真を通じて、子育てへの思いを再認識していただくとともに、かけがえない親子の絆や、絆を育むふるさとの大切さなど、社会全体の子育て意識の向上と全国各地のふるさとに元気をもたらすことを期待しているところです。

米原駅をご利用の際には、個性あふれる親子の写真をご覧いただき、あらためて親子について考えるきっかけにいただければ幸いです。

今後、ますます地方を取り巻く状況は厳しくなると予想されますが、市政の課題解決に向けて全力で取り組むとともに、これまで以上に「絆」と質を高め、「絆で築く元気な米原市づくり」を実現し、米原市から全国へ元気を発信してまいります。

上尾市は、埼玉県南東部の人口22万7千人の都市です。

上尾を楽しむなら、エリアマップを片手にウォーキングやポタリングがお勧め。市街地から少し足を延ばせば、豊かな自然を満喫できる。JR上尾駅周辺から四季の彩り豊かな上尾丸山公園を經由して、荒川のサイクリングロードに続く道のりは、周辺の文化財とともに、一度は巡ってもらいたいコースです。

歴史ある土地柄で郷土芸能の伝承も多く、これらも見所です。とりわけ、人と神輿が泥だらけになって豊年満作と悪疫退散を願う全国屈指の祭り「平方のどろいんきょ」や、畔吉地区の豪快さと藤波地区の優雅さが特徴的な2つの「ささら獅子舞」、これらは無形民俗文化財として一見の価値があります。

「笑顔きらめく“ほっと”なまち あげお」では、イメージマーク「アッピー」が、いつも笑顔でお出迎えしています。一緒にハッピー体験してみてください。



■サイクリングロード 荒川沿いを颯爽と走る



■畔吉ささら獅子舞 10月中旬の日曜日、諏訪神社と徳星寺で優美な笛の音色に合わせて豪快に獅子が舞う



■平方のどろいんきょ 八枝神社で7月下旬の日曜日に行われ、豊年満作と悪疫退散を願う。勇壮なみ合いが見所！



■「いんきょ」とは白木造りの神輿のこと



■藤波ささら獅子舞 9月下旬の日曜日に天神社で舞う獅子は優雅さが魅力



■牧歌的な雰囲気漂うサイクリングロード。近くの牧場で休憩するのも良い



■上尾市のイメージマーク「アッピー」が笑顔でお出迎え



■上尾丸山公園 春夏秋冬の彩りが豊か。とりわけ春のさまざまな桜の競演、秋の紅葉は見事

平成23年度 地域再生実践フォーラムを開催

新たな視点や手法の導入等による地域の再生、持続可能な地域づくりを目指し、地域活性化に向けた実践的エッセンスを広く提言・発信します。

- 日時 平成24年3月7日(水) 14:10~17:15
- 会場 東京国際フォーラム(東京都千代田区丸の内3丁目5-1)
※同会場にて13:00より第16回ふるさとイベント大賞表彰式が開催されます。
- 対象 地域再生に関心がある方 400人(参加無料)
- プログラム
基調講演 14:10~15:10
「大震災後の日本経済と地域活性化を考える」
講演者：高橋 進 氏(株日本総合研究所理事長)

分科会 15:25~17:15

- ①「地産地消の自然エネルギー」
コーディネーター：室山 哲也 氏(NHK解説主幹)
パネリスト：柏木 孝夫 氏(東京工業大学大学院教授)
田中 伸男 氏(国際エネルギー機関(IEA) 前事務局長)
牧 葉子 氏(川崎市環境局担当理事)
- ②「持続的な観光振興による真の地域再生の実現」
コーディネーター：清水 慎一 氏(立教大学観光学部特任教授)
パネリスト：大西 雅之 氏(株阿寒グランドホテル代表取締役社長)
山口 スティーブ 氏(株トラベル東北代表取締役)
七條 牧生 氏(観光庁観光地域振興課長)

- 申し込み方法
参加申込書に必要事項をご記入の上、メールまたはFAXでお申し込みください。
※様式は、センターのホームページ(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>)からダウンロードできます。
- 問合せ先
地域支援課 TEL: 03-5202-6137 FAX: 03-5202-0755 E-mail: chiiki@jcrd.jp



昨年度のフォーラムの様子



平成24年度全国地域リーダー養成塾 塾生の募集！

全国地域リーダー養成塾は、様々な分野で既存の枠にとらわれない斬新かつ大胆な発想のできる地域のリーダーの養成を目的とした、体系的かつ効果的なカリキュラムによる研修です。

平成元年度から開講し、これまでに734名の感性豊かな実行力のある地域のリーダーを養成してきました。

熱意ある皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

- 研修期間 平成24年5月から平成25年2月初旬
- 募集人数 40名程度
- 応募資格 地方公共団体等の職員、地域づくり団体等のメンバー(募集案内参照)
- 研修内容 地域づくりの専門家・実践家等による講義のほか、ファシリテーション研修、プレゼンテーション研修などのグループ演習を取り入れ、実践を重視した研修を行います。
また、主任講師による少人数のゼミナール形式の講座を開講し、塾生各自が地域のテーマを見つけ、調査・研究に取り組み、成果を修了レポートにまとめます。きめ細かい指導により、「自ら考える力」を養います。
- 申し込み 募集案内及び参加申込書は、センターのホームページからダウンロードできます。
- 応募方法 平成24年1月20日(金)までに、各市区町村担当課へ応募書類を提出してください。
- 問合せ先 研修交流課 TEL: 03-5202-6135

平成23年度地域活性化事例集 「シティプロモーションによる地域の活性化」発行！

現在、地域を取り巻く環境は、国・地方を通ずる財政の悪化や景気低迷、少子高齢化など極めて厳しい状況にあります。このため、各地域においては、地域経済活性化のため、地域資源や地域の魅力を最大限活用した内発的地域振興施策の積極的な取り組みがなされています。

そのような中で、まちの魅力を磨きあげ、まちが持つ様々な地域資源を外に向けてアピールすることなどで、自らのまちの知名度や好感度を上げ、地域そのものを全国に売り込む「シティプロモーション」が注目されています。

そこで、当センターでは、B級グルメや地域産品、景観、環境、映画撮影、スポーツなど様々な資源を利用した取り組みや東京事務所の新たな活用など、各自治体が実施しているシティプロモーションの取り組みについて、その特徴的な事例をまとめた「平成23年度地域活性化事例集 シティプロモーションによる地域の活性化」を発行いたしました。ぜひご活用ください。

- 問合せ先
地域づくり情報課
TEL: 03-5202-6138



★日本橋プラザビルイベントスペース

1月

- 1月11日(水)～13日(金)
秋田県仙北・平鹿・雄勝地域振興局(秋田県)
『秋田県南観光PRと物産展』
- 1月26日(木)～27日(金)
中山町(山形県)
『新鮮なかやま市』



2月

- 2月2日(木)～3日(金)
真岡市(栃木県)
『ベリーHOTHOTな真岡の観光物産展』
- 2月6日(月)～7日(火)
豊川市観光協会(愛知県)
『豊川いなり寿司フェスタ予告編in日本橋イ
ベントスペース』
- 2月10日(金)
八街市優良たくさん落花生推奨協議会(千葉県)
『落花生の郷やちまた 物産展』
- 2月15日(水)～17日(金)
七尾特産品協会(石川県)
『能登・七尾! ちょっと寄ってかんかいね。～
七尾の食と心のおもてなし』
- 2月29日(水)～3月2日(金)
淡路市商工会(滋賀県)
『淡路島 あわ神(あわじん)のキャン
ペーン(仮)』



(写真)

- 1 11月1日～2日山形県鶴岡市の観光と物産展(鶴岡市)
- 2 11月9日～10日くまもと菊池の観光物産展(菊池市)
- 3 11月16日～18日がんばろう!日本 元気な かながわ
再発見キャンペーン(神奈川県集中観光キャンペーン
実行委員会)
- 4 11月24日～25日山梨県産ワインテイスティングフェア
(社団法人やまなし観光推進機構)
- 5 11月28日～30日松山市・東湯市・砥部町 観光と物産
展(広域観光連携推進協議会)

編集後記

▼新年おめでとうございます。今年も皆さまのお役に立つ情報を集め、地域の「元気」につながる誌面づくりを目指して参ります。

元気といえば、癒しや活力を得られる場所を訪ねる旅行が、若い女性を中心に秘かなブームのようです。一月号では「パワースポット」を活かしたまちづくり」を特集しました。

▼「パワースポット」とは、一般的には「良い波動や気などのパワーがみなぎる地点」とされています。パワーが眠る場所は、景勝地などの大自然、神社や仏閣、歴史的な遺跡...等々。ただ科学的根拠が乏しいこともあり、観光面での自治体の対応にも差異があるようです。

▼パワースポット・ブームと観光の関係については、跡見学園女子大学の塩月亮子教授に考察いただきました。この二、三十年でパワースポットの定義がどう変化してきたか、ブームの経緯や背景分析も合わせ興味深い解説です。

要は、魅力ある地域資源をどう活かし、観光振興につなげるか、というPRの知恵くらべのような一面もありますが、訪問者たちにとって「そこへ行くとなぜか気持ち落ち着く」「癒されて元気になる」と感じる場所が、その人の「パワースポット」なのでしょう。

▼今月号は、長崎県対馬で島おこし協力隊活動に取り組む若者たちの熱意や、千葉県中房総地域の自治体による観光促進キャンペーン活動などの紹介記事が寄せられました。ありがとうございます。(原田)

「2月号予告」

特集II 演劇によるまちづくり(仮)

「別冊」地域活性化ガイドブック

「起業・創業支援による地域活性化」

地域づくり1月号

2012年1月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

NEW!

ワクワク、
続々。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。